第３話
郡上木の駅プロジェクト

〔白鳥木の駅の様子〕

1　講座の概要

□　日　時　　平成 25 年 2 月 24 日（日）午後 1 時 30 分から

□　会　場　　郡上市役所　大和庁舎　防災研修室

□　内　容

テーマ「郡上木の駅プロジェクト」

第 1 部　講演「木質バイオマスの活用と地域づくり～森が支える地域の未来～」

講　師　　澁 澤　寿 一 氏　（NPO 法人樹木･環境ネットワーク協会理事長）

第 2 部　講演「木の駅プロジェクトがめざすもの」

講　師　　丹 羽　健 司 氏　（NPO 法人地域再生機構理事）

第 3 部　事例発表「たかす木の駅会議、白鳥木の駅プロジェクト実行委員会」

※　この講座は、主催者責任で編集した。

2　第１部　講演「木質バイオマスの活用と地域づくり ～森が支える地域の未来～」

※　講演はスライドを用いて行われた。

はじめに

はじめに

澁澤でございます。こんにちは。雪の降る中、足元の悪い中、こんなにたくさんお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

私、この会場に入らせていただいて、皆さんのお顔つきと、それから熱気から判断するに、本当は「木の駅」の具体的な話をどんどん進めて、「ここはどうなんだ」「ここはどうなんだ」という質疑応答をするのが多分１番いいんだろうと思いました。ですが、ちょっとお時間をいただいて、そもそもなぜ今「木の駅」なのか。それからこの時代に、なぜこんなことをやるのかということをお話ししたいと思います。「木の駅」の詳しいことは、この後、丹羽さんがお話をしますので、前段階として、ちょっと、私達が扱っている森とか、あるいは今この時代がどういう時代なのかというあたりを、地ならしのつもりでお話をさせていただこうかと思っております。

1952 年生まれ。東京農業大学大学院修了。1980 年国際協力事業団専門家としてパラグアイ国立農業試験場に赴任。帰国後、長崎オランダ村、循環型都市「ハウステンボス」の役員として、企画、建設、運営まで携わる。現在、NPO 法人樹木･環境ネットワーク協会理事長として、日本やアジア各国の環境 NGO と地域づくり、人づくりの活動を実践中。また、全国の高校生 100 人が「森の名手･名人」を尋ねて聞き書きし、発信する「森の聞き書き甲子園」などの事業など、森林文化の保全の教育、啓発を行っている。明治の大実業家・澁澤栄一氏の曾孫にあたる。

講　師	澁 澤　寿 一 氏

今、どのような時代なのか

森の聞き書き甲子園

私は「森の聞き書き甲子園」という活動を11年続けてまいりまして、今年が12年目です。毎年100人の全国の高校生を、100人の森の中で生きてきたおじいちゃんおばあちゃん達のところに聞き書きに行かせるという活動を続けています。

毎年100人ずつですから、この3月で1,100人分のおじいちゃんおばあちゃん達のそれぞれ一生、要するに自然の中でどうやって暮らしてきたかということの記録と、それからそれを記録した1,100人の高校生達が全国へ散っていっているというようなことです。

この写真〔写真省略〕は、山形のマタギのおじいちゃんのところに、福島の高校生が聞きに行っているところです。マタギさんとか山の中でずっと暮らされた方、あるいは手業を持ってこられた方々の技が、高度経済成長以来、要するに今のこの近代国家の中で、どんどん消えていってしまうという危機感を持っていたものですから、何とかそういうものを少しでも残しておきたいということで、そもそもこの事業を始めました。

最初は、林野庁と文部科学省の国の事業として始めた事業で、2年目から私どものNPO法人が事務局をやっています。民間のお金で国の事業をやるという、非常におもしろい形態の事業で、12年間続いています。

なんで12年間続いたのか。普通は、国の事業は長くて3年とか5年という単位ですので、なんで続いたのかと言いますと、当初の私どもの目的であった、「森の中で暮らしてこられた、手業を持ってこられた方々のちゃんとした知恵を集積する、アーカイブを作る」ということよりも、「聞き書きに行った高校生達があまりに劇的に変わっていく」ということでこの事業が続いていっております。

どう変わるかと申しますと、今の高校生達というのは、一生懸命勉強しなさい、一生懸命勉強しないといい職場に就けないよ、あるいは、いい大学に入れないよ。そうしないと、一生食っていくのが大変だよと、要するに今の学校教育から落ちこぼれたら、君達は一生食っていけない、この世の中で食べていけない、生きていくのが大変になるんだよ、というような教育をずっと受けてきています。

ですから、たぶん皆さんがお子さんだったころに比べて、今の高校生達というのは、大変なプレッシャーの中で日々を暮らしていると思っていただいても過言ではないのかなと思っております。

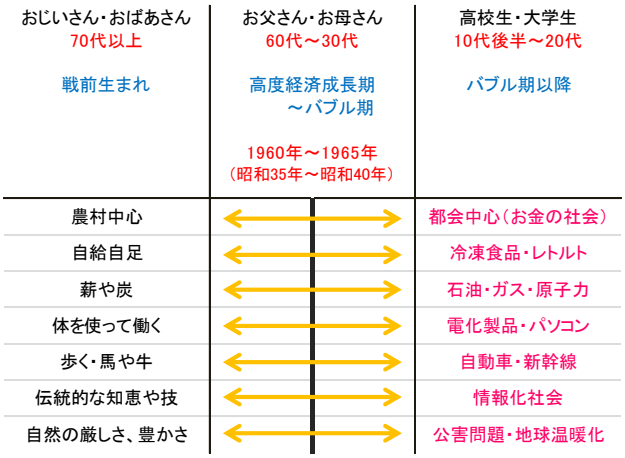
その子達が、森の中のおじいちゃんのところに聞き書きに行きます。おじいちゃんはほとんど皆さん尋常小学校しか出ておられない。だけど、ご自身の人生に誇りを持っておられる。なおかつ、（スクリーンの写真の）この方はマタギですけど、マタギというのは年がら年中、鉄砲を持って山を歩いているわけではなくて、鉄砲で狩りに行くのは、熊が穴に入る前の時期と、これから3月4月の雪が固まって熊が冬眠から覚めて外へ出てく

る時期、その２回の時期だけ山に狩りに入ります。他の時期は何をやっているかと言いますと、自分で米を作って、自分で野菜を作って、山に入って薪を取って、自分の暮らしを全部自分でやっている人達です。病気になれば薬局に行くんじゃなくて、山のどの草を煎じて飲んだらいいかとか、どの木の皮を煮て飲んだらいいかとか全部知っています。ですから、自分の生きるということ、要するに衣食住、お米も自分の食べ物も自分で作り、自分で住む家も自分で作り直し、そして自分の家の屋根も茅で自分で葺く。そして、おばあさん達は機が織れる。つまり、生きていくということすべてを、自然の中で自分でできる人達です。

そこに、「学校の勉強ができないと生きていけないよ」とずっと育てられてきた高校生達が行くと、高校生達がものすごく安心します。それまで本当にキレそうで落ち着きのなかった高校生達が、「こんな生き方があるんだ」ということで、ある意味では本当に目から鱗。しかもこのおじいちゃん達は、その人生を全然悔いにも思っていないし、皆さん誇りに思って生きている。ということで、高校生達があまりに劇的に変わり大人になっていくという姿を見て、企業が「こういう学生達が日本の国で多くなってくれば、将来の自分達の顧客になったり、株主になってくれて、よりいい日本という国ができるんだろう」ということで応援をしてくれて、この事業が続いております。

時代の転換点

聞き書きの結果をずっと聞いておりますと、どうも日本という国がまったく違う国になった時期があったなということがはっきりと分かってまいります。



右側が今の高校生達が生きている世界です。左側が先程のマタギの方だけではなく、要するに高度経済成長以前に、田畑で暮らしを立てていた、ある意味では、生きるということと働くということが同じ意味だった時代です。でも皆さん、今が一番いいと言う。この時代には戻りたくない、この時代は大変だった、辛かった、だからこの時代には戻りたくないと言われます。

と言っても、ずっと自分で生きるということができてきた時代です。その時代と今をちょうど挟んでおりますのが、だいたいこの５年間。高度経済成長に日本という国が突進をし始めた時期です。

どういう時期かと言いますと、「三種の神器」と言われたテレビ、冷蔵庫、洗濯機が、私どもの家庭に入ってくる。街中を自家用車という車が走るようになり、オート三輪が走るようになってまいります。ちょうどテーラーが入ってきて、牛や馬にテーラーが置き換わっていった時期もこの時期ですし、テーラーの後にトラクターが入ってきて、バインダーが入ってきて、あるいは田植え機が入って

きてと、農業がずっと機械化され始めたのも、ちょうどこの 1960 年ぐらいが境です。東京オリンピックが 1964 年に開かれました。東名高速道路ができて、新幹線が走る。つまり、今の私ども日本の暮らしのベースができ始めたのが、まさにこの 1960 年。もう「もはや戦後ではない」という言葉が語られて、高度経済成長に突進をしてまいりました。

ちょうどその時期は、山にチェーンソーや刈り払い機が入ってきた時期でもあります。今まで樵（きこり）さんが１本１本の木を伐っていたものが、３分間で１本の木がバタバタと伐れるようになった時代です。

それまでは、自分達の手で、自分達の手業でもって日本の自然の中で生きていこうとしていた国が、近代文明の中で生きていこうという形に方向転換をしたのはこの時期だと思います。後の歴史学者が、多分、大化の改新よりも関ケ原の合戦よりも、あるいは明治維新よりも、日本に大きな変化が起きた時期といって位置付けるであろうという５年間だと思っております。

この右側の世界（＝現在）ですが、この右側の世界は、いずれも石油ないし石油から作られる電力によって成り立っております。先程言いました「三種の神器」もすべて電気で動いております。今、原発が止まっておりますから、石油を用いた火力発電所、石炭や石油を用いた火力発電所が電気を供給しております。自動車もすべて石油で動くもの、プラスチック製品も全部石油からできるもの。社会は今、このように成り立っております。

実は今の高校生達は、この右側の社会が今後ともずっと続くであろうかということに非常に疑問を持っております。本当にこのまま大丈夫だろうか、石油はこれからずっと続いていくのだろうかという疑問です。

このちょうど変わった 1960 年という時代がどういう時代だったかという典型的な１枚の写真があります。まだ結（ゆい）で田植えをしていた時代です。農村の中にまだコミュニティが厳然と残っておりました。結で田植えをして、子ども達は畔で、その大人達の働く姿を見ながら遊んでおります。子ども達の仕事は、子守という次の子ども達の世話をすることが、この当時の仕事でございました。

要するに、高度経済成長以来のほぼ 50 年間という時間に、私どもは何をやってきたかと言いますと、ある意味ではこの世代と世代の間とか、あるいは人と人との間をずっと切ってまいりました。何で切ってきたかというと、それが煩わしかったからです。人と人とが付き合うことが煩わしいから、あるいは世代と世代が付き合うこと、結で共同作業することが非常に煩わしかった。そのために、煩わしさを切るために、機械化という形でこの間をずっと切ってきたのはこの 50 年間です。

不安の時代

今後ともこのままずっと続いていくのならば、学生達は何の不安も持ちません。ところがそれが、徐々にいろいろな形でほころびが見え始めたのが、昨今の時代だというふうに思っております。

内閣府が調べました不安に関する調査です。「不安の時代に突入した」ということを言われておりますが、バブルが崩壊してからどんどんどんどん不安が増大しております。国民の約７割の人が、自分の人生の将来に向かって何らかの不安を持っております。なおかつ、これを 40 代だけで見ますと、40 代の

８割が心に何らかの不安を持っておりますし、製造業に勤める 30 代 40 代の約４割が何らかの心の病を持っているというのが、調査の結果として出ております。

つまり、とっても便利になって、そして豊かな国になったんだけど、不安だけが一方的に増えているというのが、今の日本の姿だと思っていただいても間違いないと思います。

それはなぜか。かつては農村で一生懸命勉強して、いい学校に入ってそして会社に勤める。そうすると、自分の人生はそれから先が安泰であった。つまり、何に対して一生懸命やると安心できる人生モデルを得ることができるかということを、かつてははっきり分かっておりました。だから、一生懸命勉強して農村から都市へ若者達は出て行ったというのが、この 50 年間の流れです。かつては、皆さん、農村は農村で暮らし、都市は都市で暮らしていた国が、急激に農村から都市へと人口が移動していきました。それは今言ったように、工業製品、経済が発展するということによって、人生が安心ですよということを、ある意味ではみんな信じていた 50 年間でした。私も含めた皆さんの世代の多くは、まさにその中で一生懸命働いて国をつくってきたという自負を、多分皆さんはお持ちだと思っております。

ところが今の高校生達は、それに対して非常に疑問を持っております。自分達の世代で年金をもらえると思っている高校生は誰もいません。自分達の世代でこれからもずっと社会保険を受けられると思っている学生達もほとんどいません。いい会社に入っても、いい会社がそのままずっと続くというふうに思っていられる会社もいない。パナソニックとかシャープとか、かつては絶対日本のトップ企業といわれた企業らが何千億円という負債を抱えたり、明日つぶれるか分からないという状態になっているという。いつ会社が倒産するか、いつリストラにあうか分からない。なおかつ、リーマン・ショックあるいはバブルの崩壊も含めて、今回のユーロの問題も、金融マーケットというなんだか訳の分からないマーケットが破綻をすると、本当に爪に火を灯すように一生懸命働いてきた自分達の会社の利益が、１晩で全部飛んでしまって、それが負債に変わっていく。要するに自分たちが一生懸命がんばっても、その金融マーケットという巨大な物が、自分達のことを壊していくのではないかと。そういう不安も漠然と持っております。いったい何のために一生懸命働いたらいいのかを分からなくなってしまう世代が、今のまさに高校生の世代です。

今の高校生達は皆、バブルがはじけてから生まれた世代です。ですから、自分の社会が年々豊かになってきているということを見たことがありません。そして、どんどんどんどん日本の社会が疲弊をしていっている姿だけを見ております。ですから、日本の将来に対してそれほど希望を持っていない。なおかつ、加えて厳密に見ていくと、自分の将来が安泰だと思っていないというのが、今の日本の多くの若者の不安の原因です。

安倍さんが「アベノミクス」と言っている。経済発展がこれから日本を豊かにする。野田さんもそれをおっしゃっていました。経済がすべてだというふうになってきたのが、このまさに 1960 年以降です。経済さえ豊かになれば、生活は豊かになるんだから。

だけど、アベノミクスといって出されていることで、なにか変わったか。変わったことは何もないです。要するに、安倍さんが当選したということだけが変わった。この間の選

挙があったということだけが変わった。それなのに、なんとなく世の中の景気が良くなってきました。

例えば、いろんな工場が新しい生産システムを導入したとか、あるいはすごくいい発明をして、それが良い製品になったとかという、民間がなにか努力してできた好景気ではなくて、なんとなく安倍さんがなったという。日常はなんら変わっていないのに、昨日と今日なんら変わってないのに、安倍さんがなったというだけで、景気がポンと良くなった気がする。それが景気です。

ということは、気持ちだけでポンと良くなるならば、気持ちだけでポンと悪くなるかもしれない。そういう不安を皆が持っております。

本当に先進国だったのか

まして、今、新興国と呼ばれている中国とかインドとかロシアとかブラジルとか、この新興国をインドネシアに置き換えていただいても多分それは当たると思いますが、そういう国々がアメリカ人と同じような食生活をすると、要するに牛肉を食べると、えさとして、今のアメリカ合衆国で作られている穀物量と同等の穀物量が必要です。今、世界中の農地はどんどん減っています。塩類集積とか灌漑の問題で、農業ができなくなっている土地はどんどん増えています。そんな中で、いったいどこでそれだけの農産物を作るのかということです。中国の人が日本人と同じくらい魚を食べると、世界の海洋から、今獲れている総水揚げ量の倍以上の水揚げをしなきゃいけません。今、ウナギが獲れなくなった、マグロが獲れなくなったと言われ、世界の海洋資源が激減しています。どこにそんな魚がいるのか。中国の人達が、欧米と同じように車に乗ると、それを動かすために必要な石油は、現在の倍以上です。つまり、物理的にありえないということを実はこれは示しています。

それは何かと言うと、私どもが「先進国だ」と言って胸を張っています。新興国に対して自分達は先進国だ、先進国だ。何が先進国かと言うと、経済と物質文明においては先進国であるけれど、その新興国に対して私達は先進性はなんら示していない。

つまり、大阪万博の 30 年後に日本人は皆、携帯を持つようになった。だから、上海万博の 30 年後は 13 億人の中国の人達は、皆、同じぐらい豊かな暮らしになるんだというふうにマスコミは言いますが、それは不可能です。

なぜかというと、地球は 1 個です。限られた有限です。資源は有限です。その中で私達は暮らしていかなきゃならない。そんなときに、中国やロシアの人達に、あんたたちがんばってもしょうがないんだから、もうそんなに一生懸命働きなさんなと言うことはできません。私達はもうそれをやってきてしまったから。

私達が言えることは、私達は先進国でもなんでもなかった。それは確かに物質文明では先進国ではあったかもしれないけれど、要するに、人類にとって先に進んだ国ではなかった。ひょっとしたら自分達が間違った方向を進んできたのかもしれない。この 50 年、ひょっとしたら間違った方向に進んできたかもしれない、角を曲がってきたかもしれない。それならば、もう 1 回原点に立ち戻って、自分達がいったいどういう暮らしをつくり上げるのかということを、中国の人達、ロシア

の人達、インドの人達と一緒に考えましょうということだけが、やはり私達が言えるただ１つの回答だということだというふうに思っております。

お金がすべてではないということが、もうすでに 60 年以上前に経済学者が非常に警告を鳴らしております。経済は、社会の中の一部であるはずだと。要するに、社会という中には、経済だけじゃなくて、いろいろな喜びもあるでしょうし、いろいろな悲しみもある。それから福祉だとか教育だとかいろいろな制度が、社会の中にはたくさん入っている。その一部である経済がこのまま大きくなっていくと、いずれ社会全体を経済が飲み込むことになるぞと。そういうことを、60 年以上前に、彼１人ではなくて、何人かの経済学者が警告を鳴らしています。

現在起きていることは、まさにそのことです。要するに、今の経済の社会の中でどう豊かな社会をつくっていくのかということは、本当に今見えなくなっているというのが、今の世界中の趨勢だと思っています。

お金って何なのだろう

お金っていったい何なんだろうと考えますと、お金っていうのは、ほんとに世界中で通用する公平な言語です。要するに、ツール、道具です。

私は発展途上国での仕事が長かったのでつくづく思うのですけれど、世界中の国で英語が通じない国なんてたくさんあります。あるいは、首都や役所で英語が通じても、ちょっと街中へ出たら英語が通じない国なんてたくさんあります。ましてや中国語が通じない国、スペイン語が通じない国はもうたくさんあります。

日本の教育は、英語がしゃべれないとこれからグローバル社会じゃ生きていけないといって、一生懸命、今の高校生は勉強させられます。だけど、英語よりも何よりも世界中で必ず通じる、それがマネーです。お金です。どんなに言語が通じないところでも、お金だけ持っていけば自分の生きる最低限のものを得ることができます。ですから、世界の共通言語が、現在はお金だといっても差し支えない。今後とも多分、共通言語はお金であるんだと思います。

だけど、それには抑制が効かない。皆さんが朝、テレビをつけられて、一日中民放をつけられていると、そこで膨大なコマーシャルが流れます。そのコマーシャルの中の製品の１つでも、その製品がなかったら明日自分が生きていけないというような製品はないと思います。じゃああの製品はいったい何なのか。もっと新しいものが出ました、もっと美味しそうなものができました、もっとおしゃれなものができました、もっとかわいいものができました。全部私たちの欲望にずっと問いかけてきています。私たちは、どんどんどんどん欲望を膨らますことによって、物を消費して経済が豊かになってきた。だけどそれをほかの新興国がやってしまうと、地球は有限な星ですから破綻をしてしまう。それが現在のお金というものの状態です。

なおかつ、その欲望を大きくした部分が、バーチャルなマネーです。金融マーケットというところが非常に大きくなりました。実体経済、要するに、私たちが暮らしていくのに必要な経済の、何 10 倍というバーチャルなお金がこの地球上を駆け回っています。クリック１つするだけで何 10 億円、あるいは何 100 億円というお金が、損をしたり得をしたりという形がずっとこの地球上に存在しま

す。今回のリーマン・ショックも、バブルの崩壊も、それからギリシャのユーロの危機も、全部起きているのはその金融マーケットの破綻です。

ところが金融マーケットは、厄介なことに欲望でつくりあげた架空のマーケットなんですけど、それが破綻すると実体経済もそれも同じ比率で縮小してしまう。それで、皆、冷や冷やしています。いつつぶれるか。逆のことを言えば、アベノミクスじゃありませんけど、何にもしてなくても金融マーケットを大きくしていくというだけで、なんとなくすべての景気がよくなったというふうに思い込むのも、同時に現実です。

本当にこのようなお金というものに、自分達の命を担保できるのかということを、ある意味では高校生達は非常に、ある意味では非常に冷静に見ています。本当に経済だけで自分の命を全部投げかけてもいいのだろうかというのが、現在の若者たちの不安です。一方では、要するに経済人と政治家が、経済、経済、経済と言って舞い上がっているというのが、悲しいかな、今の日本の現状だと思っております。

被災地で気が付いたこと

高校生達が出した結論

そんな中で、3.11 の震災がございました。この震災が起きたのが３月 11 日。聞き書き甲子園の学生達から、翌日から膨大な量のメールがやってまいりました。それは、震災を受けなかった自分達がいったい被災地に対して何ができるんだろうという問い合わせでした。とにかく１回集まろう、３月中に集まろうと言いました。そのとき東京はとても集まれる状態ではありませんでした。原発事故がまだ収束をしていなかったし、どうなるか分からなかった。明日東京に放射能がやってくるかも分からない。現実にも、風の流れではセシウムが来ていた時期です。

しょうがないということで、全員名古屋に集まりました。名古屋に 200 人ぐらいの学生が集まりました。その学生達が出した結論は、「私達にできることはやはり聞き書き。聞き書きをしよう」。要するに、被災地に残った方々１人１人に、その方々の人生、今までの、震災の前の人生をちゃんと記録をしていこうと。これから復興になる。財産も家族も全部なくされた方々が、もう１回ゼロから人生をつくり直せというのは、それはあまりにむごい話だ。それならば、その生き残った方々１人１人でいいから、全部人生史をまとめて、聞き書きでまとめて、そしてその上に復興が作れるようにしようというのが、学生達の出した結論でした。

吉里吉里での聞き書き

これ〔スクリーンに映っている写真〕は岩手県の大槌町の吉里吉里という集落です。井上ひさしさんの小説『吉里吉里人』のモデルになったところですけど、大槌町は本庁で町長さんが津波でお亡くなりになりました。ですから、もう大混乱をしていました。その吉里吉里の避難所の、ちょうど７月の頭ぐらいの風景です。こうやって学生達が１人１人の方々の聞き書きを始めました。

当初、学生達が聞き書きをすることを、私どもも大変心配をしておりました。昔の良かったときの思い出を避難された方々に思い出させる、それは良くないことじゃないか、という遠慮がございました。避難所に行ってその話を恐る恐るすると、もう避難所の方が全員、とにかくやってほしいと。自分達は全部なくしてしまったと。せめて自分達が今まで一生懸命生きてたんだという記録だけでも残してほしいと。むしろ被災された方々に背中を押されるような形で、この学生達の聞き書きが始まってまいりました。

そんな中、どんなことが聞き書きをされたか。

津波というのはとても残酷な災害でしてね、１丁目、２丁目、３丁目と、海の方からずっと家が続いています。それで、３丁目と４丁目を仕切るのはわずか５メートル幅ぐらいの道路です。そこまで津波が来ました。そうして３丁目までは何もなくなりました。４丁目は、本当に震災があったのかと思うくらい、何にも壊れずそのまま残っています。当然インフラは止まっているんですよ。だけど、本当に非常に対比的でした。

お寺さんと４丁目の町内会の人達が全員自分達の家にあるお米を出してくれて、おにぎり握って、あっちにもこっちにもって全部配達してくれた。あと、お魚屋さんがね、電気が来なかったから、冷蔵庫がだめになっちゃったって、これ食べてって持って来てくれたの。そうこうしているうちに自衛隊がお水、持ってきてくれてね。つながりました。ひもじい思いしなかった。

すばらしいでしょう、吉里吉里は。それはね、いつも日頃からお付き合いしてるから。ほとんど知らない人がいないっていう感じで、いつもの人数もきちっと把握しているからできることよね。助け合うんです。

40 代のお母さんの話なんです。

学生達がこの吉里吉里に入って、とにかく何にびっくりしたか。吉里吉里って 2,300 人の集落なんです。2,300 人の集落全員が 2,300 人のことを知っているんです。だから、あの子はどこの子だ、あの親はどこで働いているということを全員が知っている。本当に全員がそれぞれを知り合っているというような人間関係が、自分達のところの周辺に存在するということを、学生達は知らなかったです。こんな町があったんだ。

実は、何でそうなったかというのは、後々だんだん分かってきます。

聞き書きで１番多かった答えがこういうものです。

最初は道路も歩けない状態で。高校生とか女の子達もリヤカーを引いて瓦礫を集めたりとかしてたので、力強いって思いましたね。

自分の町っていうのもあるんですけど、やっぱり子どもがいるっていうのは頼もしかったです。すごくみんな働いていましたね。

一時、治安が悪くなってというのもあったんですよね。車を１台置いて、高校生達が２人ずつ交代で寝ないで当番をして。今考えると、そこまでする必要ってあったかなって思うんですけど、でも、そのときは必死なんですよね。自分の家族とか近所の人を守ろうっていう、子ども達の思いなの。

震災が起きた３月 11 日、夕方になると雪が降ってきました。瓦礫を避難所に集めてそこに火を付けて焚き火を囲んだ。最初やることがないからといって、大人達は「１回笑おう」と言って焚き火の周りで笑った。そのとき、多くの大人たちは、もうここでは住めないな、どこか他の町に移らなきゃいけないだろう、もう全部この町はやられてしまったから、ということを皆、思っていた。そしたらふっと気が付いたら、後ろを見たら、高校生がブルーのポリバケツに、避難所になっていた小学校のプールから水を汲んで、学校のトイレの水を流し始めた。しかも１時間ごとに水を流していることに気付いた。

実は震災のときに１番困るのがトイレなんですよ。水とか食料はどこかで備蓄をされているんですけど、トイレはすぐ使えなくなります。そうすると、どこでトイレをやっていいか分からなくなる。

そのとき、高校生達は自分達で考えて、トイレの水を黙々と流し始めた。自分達は焚き火にあたっていて、後ろでトイレの水を流している高校生達を見て、やっと我に返った。この子ども達のためにもう１回この町を復興しなきゃいけない。自分達はここから逃げ出すんじゃなくて、ここに留まって、この子ども達が住める町をつくらなきゃいけないんだいうことが初めて分かった。

翌朝から彼らは瓦礫の撤去を始めます。自衛隊が吉里吉里に入ったのは１番最後でした。５日目を過ぎていました。自衛隊の人達にお話を聞くと、とにかくびっくりしたと。吉里吉里に入った瞬間に、吉里吉里中の道路の瓦礫が全部片付けられていた。それはその自衛隊が入るまでの５日間の間に、町民達の手によって瓦礫が全部片付けられていた。ですから、物資もすぐに送り込むことができたというようなことでした。

皆さん、この答えが本当に１番多かったです。今まで訳の分からん子達だったと。いつもコンビニの前でたむろして、何をしゃべっているか、何を笑っているか分からない、茶髪にしてピアスを開けて。その子ども達が黙々とトイレの水を流し始めたときに、自分達が何で生きているかということが本当に分かった。多くの自分達の仲間は死んだけど、自分達がこの場所に残ったのは、この子ども達のために、もう１回村を復興しなきゃいけないんだということが分かったという話をされていました。

隣保相助のこころ

そんな中で、ちょうど一昨年の７月、震災から４ヵ月経ったくらいのときに、神社の宮司さんが１冊の本を持ってこられました。「昭和８年７月 13 日」と書かれている「新漁村建設計画要綱」というものです。昭和８年３月３日に、やはり吉里吉里は大津波に襲われています。三陸地方が大津波に襲われております。今回とほぼ同じくらいの規模だったとも言われている大津波です。その大津波

の復興計画書が神社の蔵の中から出てきたといって、宮司さんが避難所にお持ちになった。

全員びっくりしたんですよ。その震災があった年の 7 月は、まだ全員が避難所にいて仮設がぼちぼちでき始めた。仮設にぼちぼち移り始めてたという時期でした。ですから、被災された方々は、もう今日 1 日どう暮らしてくかということを考えるのが精一杯。一方、復興庁からは役場を通じて、年内中にどこの高台に移転するか合意形成をしてください、防潮堤は何メートルかさ上げしたらいいかということもできれば住民の合意を取ってください、漁港も何メートルかさ上げするかというような合意を取ってください、という話が来ていた。そんなこと考えられねぇよというのが、そのときの避難所の風景でした。もう生きていくのが精一杯だった。

そのときに、昭和 8 年の人は、3 月 3 日に大津波に被災して、4 ヵ月後の 7 月 13 日には復興計画書を書いていたんだということで、全員が愕然とした。いったい役場の誰がまとめたんだと裏を見てみたら、そこには 44 名の村人の署名が書かれていた。つまり村人の手によってつくられた復興計画書だということが分かった。それでみんな愕然としてしまいました。

いったい中に何が書いてあるのか。防潮堤の話だとか産業おこしの話だとか村づくりの話だとか書いてあるのかと思ってめくった 1 ページ目に書かれていたのが、こんなことでした。

「新漁村計画の要旨」。要するにどういう心構えで漁村をつくるのかということが、最初に書かれていた。「隣保相助ノ精神ヲ振作シ共同ノ力ヲ産業経営並ニ日常生活ノ上ニ致シ以テ今次災害ノ復旧復興ヲ期スルト共ニ部落永遠ノ共存共栄ヲ営ムモノトス」云々と書いてある。その次には、「個人的利害又ハ感情等ニ依リ協調ヲ破ルガ如キ間隙アルヲ許サズ」。それから、その次には「児孫ノ教養訓練ニ力メ」。

現代語にまとめるとこういうことです。まず大切なことは、どういう心構えで生きるかということです。そこに書かれていたのは「隣保相助の精神」、要するに、お互いがお互いを助け合う。産業経営と日常生活は同時に再建しなきゃいけない。なおかつ、財産も家族も失ったんだから、1 つの家族として集落永遠の共存共栄できるような村をもう 1 回つくらなきゃいけない。それには、ただ物を復興するんじゃなくて、自分達がどういう思いでここに住むかという、心と物を両方を復興しなきゃいけないということが書かれている。その中で、個人の利害や感情に支配されない、皆、1 つの家族として生きよう。だからもう、あいつはつまらないとか、俺だけ儲けてやろうとかという感情は、一切そこから排除するんだということが書かれている。そして、残ったお金、財産を全部次世代に残そうということが書かれています。

その次に、具体的に、その生活をどうするか、食料をどう確保するか、今回の「木の駅」に近いのかもしれませんけど、エネルギーをどう受給するか、教育をどうやってするのか。教育に関しては、もう学校教育じゃなくて自分たちの集落で子どもを育てなきゃいけないというようなことが書かれていて、最後はこの場所から逃げないで、ちゃんともう 1 回ここに集落をつくるんだという決意、責任を持って残そうということで結ばれています。

この「隣保相助」の精神が 1 番大切だということが、2,300 人が 2,300 人を全員が知っ

ているという村をつくってきたんだろうということを、私達は知らされたと同時に、自分達は防潮堤だとか高台移転なのかあるいは仮設住宅だとか、全部物だけで社会を考えてきた。が、昭和８年の人達は、どういう重みで集落をつくるのかということを１番先に考えた。本当に、冷や水を頭からかけられた思いをして、そのとき避難所が本当にシーンとなりました。

自分達が思ったことは、水や食料は自衛隊さんが持ってきてくれるもの、エネルギーは電力会社とガス会社が復旧してくれるもの、教育は国や県がやってくれて、衣料と福祉も自治体が用意してくれて当たり前。この部分は住民が考えることじゃなくて、お上が考えることだと思ってきた。これらの自給とか自治とかというのに対して、まったく思考停止だったなということに気が付いたんです。リーダー達がため息交じりでした。

そのときはまだ義捐金が来てませんでしたから、お金がやはり必要だと。だけどお金だけではだめだということで、そのとき避難所では「絆」という言葉がちょうど出始めた。そういう時期だったんですね。

いったいその地域に本当に必要なもの、地域住民が地域の中でつくらなきゃいけないものは何なのかということを、このときから避難所では考えるようになってまいりました。

地域に必要なものは地域住民が地域の中でつくる

真庭市について

今日お話しするのは、これからが本領なのかも知れませんけど、山を使って地域づくりをしてきたある地域と、私はもう 15 年くらい関わっております。その地域のお話を最初にちょっとさせていただこうかと思っております。

岡山県の真庭市というところです。岡山県庁に来るよりも、米子に行った方が近い、鳥取県庁に行った方が近いというような中国山地の山の中の町です。合併して、非常に大きい面積で、人口は５万 3,000 人になりました。林業商業、基本的には林業で食っていった地域です。森林率が 81%、人口林率が 61%。山の中のどこにもある感じの風景です。旭川という川が流れています。出雲から京都へ抜ける出雲街道が通っていました。古い町並みがぽつんぽつんと残って、後ろの山にお城がありました。茶色い建物が役場です。ほんとに中国地方の山間の小さな集落です。

地域づくりのはじまり

そんなところに、1992 年に１人の女性がＵターンで帰ってきました。東京の美術大学を出た女性で、彼女は染物と織りをやっていて、黙々とそれぞれの家を回って、それぞれの家にその家の家業のあったデザインをした暖簾をかけ始めたんです。出雲街道の古い町並みだったんですが、古い家もあれば、家はサッシもありました。サッシの家でも、暖簾を飾って花を活けることで、町並みができていった。町並みっていう町の風景とは、自分達の手でつくれるんだなってことを、ある意味ではこの女性に教わった。それからこの地域は地域づくりが始まっていきました。

とは言っても、一方で、林業、要するに製材業がこの中に 34 軒ありましたが、今から 15 年前から最初の５年間ぐらいでそのうちの３軒がバタバタバタっと潰れました。このままいったら製材所は全部つぶれるぞという思いがありました。

製材業が成り立たなくなっている、これは各地方全部一緒だと思います。山の木が材にならない。山の木がお荷物になってきている。先祖が植えた山の木が、自分達の子どもには、財産としてではなくて、お荷物として引き継がなきゃいけない。それでは俺達がもう生きていられないよね。なんとか山の木で食えるようにしなきゃいけないということを、皆で考え始めました。

そのとき、皆で簡単な小さなフォーラムをやりました。フォーラムでまとまった宣言、思いがこれです。

１番目を行政が書かれました。「１．真庭地域等の山間部から排出される木質系資源を活用して、広域的な産業連携を図る。」木と関わり合ういろんな産業をつくろうというのが行政の目的でした。

２番目が、市民が作ったやつです。「２．真庭地域内の自然資源で、生活が結ばれた実感を共有し、地域の誇りを創出する。」先程言いましたように、山が財産ではなくてお荷物になっている。それではもう生きていけん、このまま死んでいけん。何とかこれを、自分達が生きている間に山を財産にしたいという。そして、山と自分達の生活が結ばれているというその実感を、自分達が生きているうちに共有したいというのが、そのときの村人達の言葉でした。

３番目は、要するに人材と情報を集めようというものです。この３つをスローガンに、地域が動き始めてまいります。

13 年後の「真庭人の1日」

最初の６年間は、もうただただ本当に勉強するだけでした。どうしたらいいのか、どうしたら村ができるのか、それをずっと考えてきました。私もその勉強会に呼ばれました。1997 年ぐらいです。この最初の６年間の１番最後ぐらいに私がお邪魔をしました。それから、ずっとその地域とお付き合いをさせていただいております。

この地域が１番大きく変わったのは、1997 年に「2010 年真庭人の１日」という小さな冊子を作ったことなんです。1997 年の 13 年後、2010 年の 10 月のある１日の、このまちづくりをやっていた中心メンバーの５名の、それぞれの家族の朝から晩までの１日を書こうというのをやったんです。

13 年後なんて分かるもんか、13 年後なんて夢物語を書いてもしょうがないという反

対もありました。だけど一方で、13 年後というのは確実に全員が 13、年を取るということなんです。だから小学生であった子どもは大学生になっているかもしれない。いったい大学生になっているなら、どこの大学にその子は通っているのか、岡山市内なのか、東京なのか、大阪なのか。それとも大学に行かないで、ここに残っているのか。それぞれの 13 年後を 13、年を足して、もう 1 回全員でそれぞれヒアリングをしながら作っていこう。

どんな文章になったかというと、「私、造り酒屋の均ちゃんですが、私の酒蔵では 10 年ほど前から、タンクを洗う洗剤に、環境負荷の低い砂糖を原料としたものを使っている。そんな私も、今年 60 歳代になり、最近では少し耳も遠くなってきた」云々というふうに書かれています。

ここに書かれていることは 13 年後ですから、まず 3 年後には環境負荷の優しい洗剤に変えようということと、それから、せせらぎが聞こえる川を維持しようということが書かれています。この他に、例えば朝、どう食卓に誰と誰がつくのか、どういう食材がそこに並ぶのか、そして仕事はどこに行くのか、学校はどこに行くのか、あるいは学校から帰ってきて、夜は一家団欒、何をして楽しむのかというようなことが、延々とその 5 人の家族で書かれているんです。

これを 2010 年に全員で読み返しました。本当に驚きましたけど、約 9 割のことがそのとおりになっていました。つまり、13 年後って夢物語ではなくて、今日からの積み重ねが 13 年後なんです。

「環境に優しいまちをつくろう」と言っていたら、それはどっかに消えていたと思います。「木材資源を利用しよう」でも消えていた。だけど、いったいじゃあどう利用するのか、どう環境に優しいのかという具体的な積み重ねをした。

それから、やはり村が変わり始めた。先程言いましたように、まちづくりで町の景観をつくっていこうということと、それから木質を本当に産業として利用していこう。もともと製材の町ですから、木から材木を作るというルートは動脈としてある。だけど膨大なゴミがそこから出ている。製材しても歩留まりがだいたい 4 割ぐらいです。ですから 6 割ぐらいがゴミとして出る。それを製材所の裏でドラム缶で燃してしまうのか、それをお金に換えていくのかということから考えていこうぜというということで、村が、地域が、ずっと変わり始めていきます。

木質資源の利用の2つの方向性

ご承知のように、木は 50 年 60 年と育てたものです。それの利用の仕方は 2 つしかありません、「物質利用」と「エネルギー利用」。

今は、発電だとかバイオマス発電だとかが盛んに言われるようになっています。この「エネルギー利用」が、なんとなく木材のこれから事業の主流。特に、間伐、未利用間伐材に関しては、このエネルギー利用が主流になっていくと思うのですが、やはり忘れていただきたくないのは、木材って 50 年 60 年と育てたものなんですよ。育てたものは本当はちゃんと「物質」で利用してあげる。材木じゃなくて、パルプでもいいかもしれません。とにかく、物として利用してあげて、そして物として利用できない最後の最後にエネルギーとして利用するというのが本筋だと思

っております。そこだけはやっぱり外してはいけない。そういう意味でお話ししました。

ありとあらゆることをやってみる

それから皆がやったことは、ありとあらゆることです。何か１つにかけて、何か１つだけやると、その何か１つがこけたときに地域全部がこけると。だから、とにかく地域で考えられることは、小さい事業も大きい事業もやる。事業規模で良い悪いは決めない、小さい事業も大きい事業も全部やろう。

コンクリートもプラスチックも混ぜました。それから、でんぷんとも混ぜました。それから、粉のビジネスもやりました。墨のビジネスもやりました。粉を珪藻土で固めて猫砂もつくりました。

猫砂は爆発的にヒットしました。今でももう６年連続ぐらい、大手インターネット通信販売会社のペット部門の売り上げの１位にずっとなっています。これを作ったのは、若い 20 代の兄ちゃんです。兄ちゃんが、ヒノキの製材所のおがくずを集めてきて、それを珪藻土と一緒にこねて、ギューッと押し出すと、ポロポロポロとペレットみたいなものができるのです。それを消臭剤で売ろうと言って、彼は地域内の工務店、要するに日曜大工のお店をずっと回りました。そこに置かせてくれということで頼み込みました。皆、協力してくれて、じゃあ置かせてやろうと、置かせてやりました。ぜんぜん売れません。なんにも売れない。当たり前ですね。山ん中ですから、猫を家の中で飼うなんて誰もいない。猫はみんな外を歩いていますから、おしっこは勝手にやります。その兄ちゃんがそこでめげなかったのは、それを持って「じゃあ俺、渋谷に行って来る」と言って、岡山の山ん中から渋谷に行きました。渋谷の歩行者天国で、その袋を売り始めました。５kg の小さい袋に入れて売り始めました。爆発的に売れました。つまり、都会に住んでいる、ペットを飼う、ある意味では寂しい暮らしをしている、心を癒すために猫を飼うという人達に売るんだと。その人達は、日曜大工センターへ行くのではなくて、その人達がやっているのはインターネットだっていうんで、大手インターネット通信販売会社にそれを持ち込み、売り始めました。

そういうように、それぞれに物語があります。成功したものもありますが、失敗したものもあります。その兄ちゃんは同時にヒノキオイルもやりました。ヒノキオイルは見事に失敗しました。

役場は燃料でやりました。発電もやりました。ペレットも作りました。とにかく何かにかけるんじゃなくて、山を利用できるありとあらゆることを皆やっていこうということが、そのときの真庭の考えでした。

木の集積場のはじまり

最初は、製材所から木材として出て行って、全部捨てていました。捨てていたものがもったいないからと言って、エネルギー利用やマテリアル利用をしだすんですね。ところがこれをやっていくと、すぐに行き詰まりました。なぜかというと、製材所の製材する規模が、毎年ものすごい変動するんです。住宅着工率が良くなると、製材所はものすごく材を伐ります。住宅着工率が落ち込むと、どんどん少なくなる。つまり製材所の稼働率によってどのくらい利用できるかが変わってきてしまう。これじゃたまらんということで、やっと

７～８年経って、製材所を通さない集積場所を作ろうと。

実は、「木の駅」ってここなんだと思うんですよ。とにかく何でもいいです、木を持っていらっしゃいという集積場所を作ろうと。要するにこのルートができて初めて、地域内で安定的に山のものが回るようになってきました。間伐材だけでじゃありません。広葉樹も出てきます。それから製材所の背板も出てきます。

この兄ちゃんは、素材業者で林業をやっている人で 10ｔのトラック全部が風倒木です。しかも、もう２～３年経っているような風倒木です。彼は、土場の隅っこにこの風倒木をまとめて置きます。市場の値段がものすごく下がったときとか、あるいは雨が続いて短期資金が必要、要するにトラックの運ちゃんの給料を払わなければならないとかそういうときに、まとめていた風倒木を一斉にこの集積場に持っていきます。

集積場は、もり券（地域通貨）でなくて、現金で買ってます。その代わり、１ｔ当たり 3,000 円です。もり券が１ｔ当たり 6,000 円～5,000 円でやられていると思います。それに対して１ｔ当たり 3,000 円です。これだけ考えたら、決してとてもとても合いません。だけど、そうやって短期金融だと思うといいのです。銀行でそんなお金を借りようと思ったら大変ですけど、とにかく山に置いていたものをまとめてここに出してくれば、少なくとも、10ｔ車で持ってきますから、３万円になります。１日３回来れば、ほぼ 10 万円になります。それは決して安いものではないということに、全員が気付き始めます。

集積場の発展

その集積場を作るまでは、そんなもの出すもんか、１ｔ当たり 3,000 円なんて誰も出すもんかと、皆が言ってました。でも、とにかく作ろうと、作りました。そうすると、１ｔ当たり 3,000 円でも自分の利益がある出し方があるんだということを、皆が分かり始めました。皆がそれを考え始めて、だんだんだんだん、材が集まってくるようになって、今、この集積地ではだいたい年間２万ｔぐらいの材が集まってきています。

そのうちに、10ｔトラックで持っていけばどうにかなるけど、軽トラで持って行ったらとても合わねぇなということを皆が言い出します。じゃあ軽トラで合うのは、何 km 圏までなのかということを、今度は皆で考え始めます。そうすると、軽トラは 10km 圏が限度だと。10 ㎞圏に山土場を作って、10km 圏で現金化できるようにしてやれば、軽トラでも出せるじゃないかという話が出てくる。軽トラである程度集まったやつを、集積地にまとめて 10ｔ車とか４ｔ車で持ってくるというシステムを作ろうと。

じゃあそれは誰がやるんだ。その運搬のコストはいったいいくらにするのかってことを皆で決めました。どこに土場を作るかということは、主に森林組合が中心になって決めましたが、そこから誰がどう運ぶのか。どういう形態で運ぶのかというあたりは、全員の合議でよって決められています。要するに、土場に２ヵ月～３ヵ月置いてから運ぶのか、土場に出たものをすぐ運ぶのかによっても、乾燥の度合いから何から全部違って、その後の加工の度合いも全部違ってきます。そういうようなことをそれぞれの人たちが、自分達で、「じゃあ、どこに土場を置こう」「ここからは誰が運ぼう」「いくらで運ぼう」とい

うことを決め始めて、それを、「じゃあ今度はどうやって利用するか」という人が出始めてきます。

熱エネルギーとしての利用

今、真庭では、蒸気ボイラーと温水ボイラーとストーブに利用しようとなっています。実は、真庭ではとにかく熱利用をやろうということを皆が言ったんです。それは、今の電気事業法を見ていただくと分かるんですが、発電と送電と配電というのは、全部電力会社が一括でやっています。それでいうと、電気をつくっても、その電気を直接自分達で使うということがなかなかできない。書類の上ではできるのですが、実際使った電気をそのまま使うということができない。ならば熱を使おう。

本当はストーブというのが一般家庭では１番分かりやすいんですけど、ストーブというのは冬しか使わないから、とにかく事業所のボイラー。全員で、どこの事業所にどういうボイラーがあるかを役場も中心になって皆で書き出します。それで、それぞれ何年経っているか、償却がどれくらい進んでいるかっていうのを全部チェックしていって、もう償却しているぞっというところに皆で押しかけていって、「お宅、今度ボイラー変えるときに木質に変えてくれ」って。木質なんて扱ったこともないし、ましてや安定的に燃料を供給してくれるのかっていう話になって、じゃあ、安定供給協定を村で台本を作ろうと。必ず安定的に供給する、安定的に供給できなかったら、供給する側がちゃんとリスクを負うような仕組みっていうのを、今度は村内でつくっていく。それによって、ボイラーがだんだんだんだん木質に変わっていく。

地域内にお金が残るようになった

どう変わったかというと、これは平成 23 年度の段階なんですが、原油代替で、約 11 億円のお金。11 億円のお金が、今までは結局、中東に行っていた訳ですね。要するに石油だとか重油だとか灯油だとかそういうようなものになっていっていた。それが地域の木材に変わっていった。山の木を買っていきますから、約５億円の売り上げになっていく。それによって、山側に 11 億円のうちの５億円が返っているということが分かってきました。

11 億円が多いか少ないか。ちょうどね、全体の熱エネルギーの 10%が置き換わったんです。10%が置き換わって 11 億円。それが多いか少ないかというのはいろんなご判断があると思うのですが、11 億円のお金を地域に真水で落とそうと思うと、観光業で他所から人を呼んでこようとすると、100 億円ぐらいの売り上げを上げなければいけない。それでやっと 10 億円ぐらいが地元に残るというのがだいたいのイメージです。ところがこれは、外から人とお金を持ってくるのではなくて、外へ出て行ったお金を 10 億円地域内に残すというものです。

その 10 億円は、真水で地域内に残ります。ですから、まず行政の財政が決定的に良くなり始めます。それから、何といっても町の中で活気が出てき始める。これが手に取るように分かるようになっていきます。地域内のエネルギー需給率が 11.3%、全体の 10 分の１です。これが多分ヨーロッパに行くと、100%っていう村がたくさんあります。例えばこれが 50%になるだけでもぜんぜん違ってきます。

お金で言っていますけど、例えば、今回の東日本大震災があったようなときに、自分達のエネルギーは自分達でつくれるんだとなれば、何も東京電力だとか、あるいはガス会社の復旧を待たなくても、自分達の手でもう１回燃料を確保することができる。それがもう圧倒的に違ってきて、自分達で自分達の生活をつくっているんだという、それがビジネスになっているんだということに気付いてきます。

ツアーで地域の人が、子どもが変わっていく

そして、実に多くの人達が駆けつけてくるようになります。３年間に 5,000 人、今年は NHK のニュースに取り上げられたりもして、これ以上の人達、多分年間１万人ぐらいの人達が、ツアーで真庭を見に来るようになった。

真庭はとにかく自然全部を見せようと。手の届いた森も、手を行き届いてない森も見せて、それから発電事業も見せて。それから毎年ペレットも作っている。ペレットを作る工場だけを見せるのではなくて、それが地域内でどう使われているかということを見せていって、使い勝手の話を、そこで使っているおかみさんだとかそういう人達にしてもらおうと。他所から来る人達に工場を見せるんじゃなくて、木質で生活が成り立っているその生活を見せようというコンセプトでツアーを続けています。

先程の猫砂。それからコンクリートに混ぜると、非常に保水力があるコンクリート製品を作ることができます。ヒートアイランドなんかに非常に有効だということが、最近分かってきました。エタノールも作りました。それから、木質バイオマスではないのですけど、バイオマスならばと言って、産業廃棄物の業者の若社長が温泉街を回って、温泉街のてんぷら油を集め始めて、それで温泉街の中のバスを動かし始めました。

お分かりの通り、地域で産業廃棄物を扱っている若社長さんは、なかなか地域で認められないです。いろんな商工会なんかの会合にも、彼にはなかなか声がかからなかった。彼はどちらかというと、非常にちょっと暗くて下を向いていたんです。だけど、こうやってバイオマスだといって子ども達や小学生達が見学に来ます。そうすると、まったく顔つきが変わってきて、今、彼は地域のリーダーです。彼も明るくなってきますから、どんどんそういうところからも声がかかってくる。何もバイオマスって、木質だけじゃなくて、自分達の周りにいろんなものがあるんだということに気付いてきます。

同じように、市営の堆肥センターなんですけど、ここに配置された若手の職員達は皆、下を向いていたんですよ。堆肥センターなんて回されて、役場にせっかく勤めたのに就職先が堆肥センターかよ。その子達に、こうやって小学生達がツアーに来ます。牛糞の中に木片を一緒に混ぜて水分調整をやったりとか、この堆肥をもう１回土に返したり、それから、その土で育った牧草で育った牛乳の乳を飲んだりとかいうことが、地域内の学校教育の中で取り組まれていきます。その子ども達が行くと、堆肥センターのお兄ちゃん達が、俄然、着ているものから何から顔つきからまったく変わってきます。誇りを持って子ども達にガイドを始めてくれます。それがある意味では、地元のものを使った１番の効果なのかもしれないというふうに思っております。

何よりも子ども達です。子ども達に、今これが、私達が到達した時点じゃないと。あなた達が大人になるころに、本当に真庭の山は

あなた達にとって宝物になるからねと。あなた達はここで住んでいれば、他の地域に暮らすよりもはるかに恵まれた条件で、エネルギーを得ることもできるし、職場を得ることもできるんだということを、地域全員で環境教育をしているんです。それによって子ども達の笑顔が変わってくるし、この 10 年間で、地域の農業高校の偏差値が猛烈に良くなってきた。つまり、地域にそのまま残りたいという若者が急激に増えてきました。今までは、優秀な子は普通高校に行って地域外に出て行ったのが、多くの子が地域内にとどまるようになってきました。

それから、新エネ大賞をもらったりもしました。

お金を外から持って来るシステムと外へお金を出さないシステム

バイオマスをやっていてつくづく分かることは、皆さんがやられている「木の駅」もまったくそうなんですけど、かさばって重いんですよ。かさばって重くて、雨に濡れたら汚いし。だけどそれは、地域内で処理するのが 1 番ベストなんです。どうやって地域内でこれを消費できるかというシステムを、「木の駅」で排出するとともに皆さんで考えてもらいたい。それが確実に地域内にお金が残るということなんです。

皆で利用方法を考えます。良いボイラーありませんかね、良いストーブありませんかねとか。特に男性は機械類が大好きですから、すぐそっちへ行くんですけど、実は肝は運搬システムです。要するに、誰がいくらでどこに運ぶのか。これを決めるのが 1 番大変です。1 番大変なところ。逆なことを言えば、地域内で 1 番雇用が稼げるのがこの運搬システムなんです。林業の現場は、どんどんどんどん生産性が良くなってきます。ですけど、この運搬は確実にトラックでやっていきますから、雇用が発生してきます。

そういうことを考えていると、「木の駅」も含めた木質の産業というのは、エネルギー産業だとか素材事業のように思えますけど、実は地域づくり事業です。要するに価格を決めるのも自分達、それから、運ぶ人を決めるのも自分達、そして、それをどう利用するかを決めるのも自分達だってことがだんだん分かってきます。その中では、外からお金を持ってくるというシステムと、外にお金を出さないという両方のシステムがあるんだということに気付いてきます。

もり券（地域通貨）というのは、実はこの「地域の外にお金を出さない」というシステムです。つまり、もり券に変えることによって、地域内でお金を回していこうということです。

今まで地域活性化というとで、皆、外からお金を持ってくることだけ考えていました。だから何か施設を造って、そこに観光客を呼ぼうというのが地域活性化でした。だけど、このバイオマスを作ると、外にお金を出さないというシステムを作ることができるということです。

エネルギー利用することの位置づけ

自然再生エネルギーというのは、いろんな位置付けがあるんだと思います。経済性を優先とするのか、そこに住む幸せを優先とするのかによって、その扱いは違ってきます。どちらが良くてどちらが悪いという話ではないんですよ。

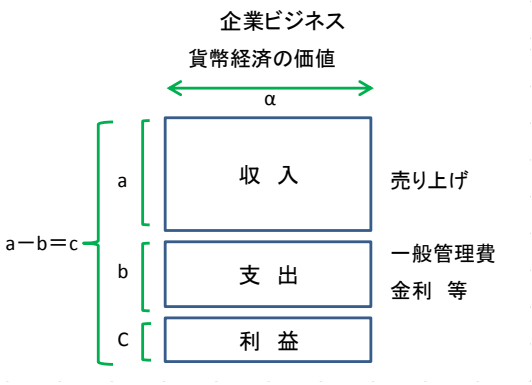
例えば、個人の薪利用。「俺はね、薪ストーブの火を見ているだけで、それは幸せなんだ」。その人は経済性なんて考えてないんですよ。少々薪が高かろうが安かろうがその火を見ている生活が幸せだと思う。それはそれで十分ありです。

今、自然再生エネルギーというと、すぐ太陽光だ風力だと言います。太陽光や風力は、装置を買ってくればその日からそれは動くんです。ですから、いくらの装置を買ってきていくら利益を出すかが、ものすごく簡単で分かりやすいんです。だけど所詮、装置、おもちゃを買ってきて動かすのと同じだということです。薪だとか、小水力だとか、木質とか、「木の駅」だとか、これはもう全部人と人が関わるんですよ。

先程、最初の方でお話ししました。50 年間、私達は人間関係の煩わしさを全部取り払おうと思って、国を豊かにしてきたと言いました。実はそれがいびつな社会をつくってきたということを、もうお分かりだと思います。都会では隣に誰が住んでいるかも分かりません。女の子が住んでいる、殺しちゃう、刻んで下水に流しちゃうという事件もありました。それは明らかに行き過ぎ。高校生達は、皆、携帯を持ってつながろう、つながろうとしています。だけど人間関係は煩わしい。その煩わしさを、ある意味では「木の駅」はとっても含んでいます。だけど、煩わしさを含んで人間関係がつながりますから、そこで幸せも得ることができるんです。やはり幸せって、人からもらうことだと思います。自分で財布の中を見て、ああ、今日１円たまった、２円たまったというのも、それは幸せかもしれません。けど、本当の幸せは、社会の中で自分が必要とされているなということを意識している、あなたがいるからこれができるんだよという人間関係の上で、初めて幸せというのは出てくるのだと私は思います。

地域内のエネルギーはいくつかミックスでかまわないと思うんですよ。原子力はどうするかという話はまた別にしましても、自分達はいったい何を狙っているということを考えて、地域のエネルギーというのは考えるべきだというふうに思っております。

皆さんがご覧になっているいろんな損益は、１番上に収入がきて、そして支出がきて利益がくるという、この表をずっとご覧になっていると思います。



実はその木質を使った地域づくりというのは、いったいどういう社会をつくり出すのか、まさに 13 年後の真庭人の１日じゃないですけど、皆さんの、この郡上の山との、これから 10 年後のいったいどういう地域をつくりたいのかということがある。そこではお金で図れるものとお金で図れないものがある。そのためにいったいどういう社会経済システムをつくらなきゃいけないのかというのが本当は上にくる話です。上と下が本当は逆な話なんだということを、つくづく思っております。

真庭では、いろいろな産業ができました。税収も上がりました。二酸化炭素が排出される量も削減されました。今まで外へ出ていた

お金が地域内へ還元されるようになりました。これは数値で図れることです。

だけど、実際良かったのは、先程の堆肥センターの兄ちゃん達の話じゃないですけど、市民とか事業者とか行政の信頼関係ができた。皆、この１つの木で自分達はつながっているんだということが認識できる。子どもにもそれがつながっている。行政に頼らないで、自分達の手で地域ビジョンがつくれるんだということが、この 10～15 年間ぐらいで分かった。そこで初めて、当たり前のことのように「自分達の町は自分達でつくるんだ」。自分達の町は行政がつくるんだと思っていたけど、自分達の町は自分達でつくるんだということが分かったということが、多分１番大きかった成果なんだというふうに思っています。

被災地でも、今、話しているんですね。水や食料、エネルギーを自給するっていうのは無理だと。だけど、せめて、どうやってそのエネルギーを得ようかということは、もう自分達で決めようぜと。お金はやっぱり必要だと。でも、お金だけではだめで、いったい何を他につくらなければならないのか。そこで「絆」って言葉が出てきたり、「共同体」だとか「世代と世代のつながり」だとか。「やはり祭りは重要だ」「生きていくには知恵とか知識も重要だ」とか。

そういうときにブータンの国王が来て幸福論の話をした。「ブータンでは人と人との関係性、人と自然の関係性と、世代と世代の関係性の両方のことをもって、幸福というと憲法に定めたのですよ」という話をされた。それで皆、被災地ではすとんと落ちたんですよ。俺達は子ども達の暮らす社会を、そして子ども達が何に対して一生懸命になって、何に対して幸福と思えるかという社会をつくらなきゃいけない。それには結局、この関係性をもう１回全部つくり直すという作業だということが、被災地の人達が気付いたってことです。

もう仙台を目指すのはやめよう、もう東京を目指すのをやめよう、俺達は結局、物だけ復興させるんじゃなくて、心と物。心というのは自分達が何を価値と思うかという価値観と地域の、その両方を一緒に復興させよう。その中で、森だとかエネルギーだとかいうのは、非常に大きなものだということに、今気付いてきました。

今まで生活は買うものだと思ってきた。だけど地域とか生活というものはつくるものだ。要するに、自分達の手によってつくれるんだと。そのためには１人ではだめだと。やっぱりコミュニティの再生、要するにコミュニティがベース。コミュニティというのは非常に紛らわしい。だけど、人間関係の中から新しいものをつくることができるのだということに、気付いてきたというのが、今の被災地の現状です。

さいごに

最後のスライドです。山形県にある「草木塔」と言われているものです。１番右側の大きい石が草木塔です。草木の慰霊碑です。上杉鷹山の江戸時代の末に作られたものです。その左側にある三角形の小さい石が馬頭観音、家畜の慰霊碑です。その横が庚申さん、鳥や獣の慰霊碑です。そして１番左が、お不動さんです。これを毎日ばあちゃんとじいちゃんがきれいに清掃して毎日手を合わせている。何に祈っているのかって言ったらば、「今日１日生かせてくださってありがとうございます」って祈っている。

そのじいちゃん、ばあちゃんとは、私はもう 10 何年間の付き合いです。休みの日もありません。じいちゃんも黙々と山の仕事をして、田の仕事をして、畑の仕事をして、腰が曲がって、もう息子達はみんな都会に出て行ってしまって、２人だけで暮らしている。２人だけで暮らしていて毎日祈っているのが、「今日１日生かせてくださってありがとうございます」。

そこには草木も牛や馬も家畜も、それから鳥や獣も、それから多くの神様も全部一緒。その中の一部として、自分が生かせてもらって、そこに関係性を持たせてもらっているということに幸せと思う。これが多分、日本人の精神性なんだと思います。

皆さんがこれから扱われる森、それは確かに森を見れば、そのうちもり券に見えてくるかもしれません。だけどそうではなくて、森と地域と自分達の次の世代が、この空間の中で一緒に生きていけるんだということに対する、ある意味、感謝というか、喜びを得るための作業なんだというふうに私は信じております。

長くなりましたが、私の方からは、これから丹羽さんが話をする、「木の駅」のシステムの根本的な部分、要するに、何に対して私達はどういうことをやろうとかしているのかという部分を、最初にご紹介をさせていただきました。どうもありがとうございました。

3　第２部 講演「木の駅プロジェクトがめざすもの」

※　講演はスライドを用いて行われた。

はじめに

こんにちは、丹羽と申します。これからしばらく、ここのところ「木の駅」あるいは「木の駅」ができるまで、そして、これから「木の駅」ってどうなっていくんだろうか、村はどうしていくんだろうかっていうことのお話しをさせていただきたいと思います。

自己紹介の前に、ちょっと皆さんに質問です。

高鷲町って何人ですか、人口は。

〔会場から〕3,000 人。

白鳥町は？

〔会場から〕1 万 2,000 人。

分かりました。高鷲町の人口は 3,000 人ですね。

名古屋大学の高野研究室に井筒君という、今、岡山で「木の駅」を立ち上げたりしている子がいるんですけれども、その子が卒論でやったことです。人口 1,400 人の豊根村という、私もちょっと関わったことがあるところですが、その人口 1,400 人の村の年間エネルギーの利用、つまり、ガソリン、灯油、電気、ガスなどのエネルギーに使う金額は年間でいくらでしょう。豊根村は 1,400 人ですから、高鷲だとこの倍ですね。

1953 年生まれ。信州大学農学部卒。農業就業を経て、1980 年農林水産省入省。2005 年愛知県豊田市で市民参加型森林調査「森の健康診断」運動を開始、現在全国 30 余都道府県で展開中。2009 年に NPO 法人土佐の森・救援隊が NEDO 事業とリンクし成功を収めた林地残材収集システムの一部を、大規模プラントがなくても全国どこでも導入できるシステム（＝木の駅）として、恵那市中野方町にて開始。2010 年３月に東海農政局早期退職後、同年４月より鳥取県の地域マネージャーとして NPO 法人賀露おやじの会で、鳥取県智頭町木の宿場プロジェクトの立ち上げに成功。現在、木の駅は標準化され、恵那市、智頭町、豊田市、大垣市、土佐市で立ち上がり、他に目下全国約 10 地区で準備中で、その手伝いを行っている。
鳥取大学地域学部非常勤講師、岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師、NPO 法人賀露おやじの会事務局長、矢作川水系森林ボランティア協議会代表、矢作川森の健康診断実行委員会代表、NPO 法人夕立山森林塾副代表、NPO 法人山里文化研究所副代表、組手什おかげまわし協議会代表を兼任。著書に『森の健康診断』（筑地書館）他。

講　師	丹 羽 健 司 氏

20億円だと思う人、手を挙げてください。

〔会場挙手なし〕

いない。

10億円だと思う人、手を挙げてください。

〔会場、５名程度が挙手〕

２億円だと思う人、手を挙げてください。

〔会場、２名程度が挙手〕

１億円だと思う人、手を挙げてください。

〔会場挙手なし〕

もう１度いきますね、手を挙げる人が少ない。20 億円だと思う人、手を挙げてください。

〔会場挙手なし〕

いない。いないですか。

10億円だという人、手を挙げてください。しっかり手を挙げてください。

〔会場、20名程度が挙手〕

２億円だと思う人、手を挙げてください。

〔挙手、５名程度が挙手〕

１億円くらいだと思う人、手を挙げてください。

〔会場挙手なし〕

いない。

２択になりますね。

実際のところ、細かく計算すると豊根村では５億円ですから、高鷲町では10億円が使われている。すなわち、アラブなりアメリカにそれだけのお金が行っているということが分かった。

先程、真庭で（自給されている熱エネルギーは全体の）１割でした。高鷲町では年間約10億円ですが、この１割は１億円。10億円のうち１割でも地域に落ちると、１億円がぐるぐる回っていくんだよねということが、エネルギーと村との関係、あるいは木と村との関係なのかなということを、最初にお話しします。このことは１番最後にまた触れます。

私は矢作川水系森林ボランティア協議会というボランティアグループを、今から 10 年前くらいにつくって、今では 15 グループぐらいで 200 人います。いちおうチェーンソーを持って、森林の調査から伐木造林までできるかなり大きなグループです。

山里文化研究所というところでは、山里の聞き書き塾というのをやっています。ここでは、先程の「森の聞き書き甲子園」の大人版、大学生以上でやっています。代表は清藤さんという方で、私は副代表。実は澁澤さんは平理事なんです。私は副代表、澁澤さんは平理事。これが唯一の自慢なんです。

夕立山森林塾というのは、やはり矢作川水系森林ボランティア協議会のようなものを、庄内川流域でもつくれないかということでつくってみたのが森林塾です。それが実質的に５年を経て、「木の駅プロジェクト」を立ち上げ、もう４年目ぐらいになります。

その間、私は鳥取に行ってまいりました。こちらでやっていた「森の健康診断」、「山里の聞き書き森林塾」、それから「木の駅プロジェクト」のノウハウを鳥取に移転してくれないかという依頼がきました。講演に行ったとき、皆さんから「早期退職して鳥取に来んか」と言われました。「24 時間、好きなことやれるからいいよ」と言われて。いいですね。「給料半分以下だけどね」と、ちょろっと小さな声で言われた。でも、いいですね。悪魔のささやきで、ほろりとなって、56 歳

で退職して、母ちゃんに大反対されてもそのまま行っちゃって。２年、鳥取で「木の駅」を立ち上げたり、全部やってきました。

それを今度、全国に広めることできないかと思いました。小水力とか地域の自然再生エネルギーをやっている岐阜の NPO 法人地域再生機構というところで、これを全国に広げる。暮らしも変えていく、エネルギーから暮らしも変えていく、山から変えていく。そういうことを地域再生機構という NPO 法人で去年から始めました。

そうしたら、これは木とかエネルギーだけじゃなくって、山村を再生する仕事じゃないのということで、総務省の地域再生マネージャーということで、今、あちこちにお手伝いにまいっています。

そんなようなことをやっているやくざな人間でございます。

これ〔スクリーンに映っている言葉〕は、まさに聞き書きそのものです。鳥取にいるときに、智頭町などで「木の駅」もつくりましたが（「森の健康診断」や聞き書きなど）全部やってきた、そのときの言葉です。

学生や社会人が一緒になってやりました。11 人のじっちゃん、ばっちゃんに、学生や大人が聞き書きをして本にしました。題名も彼らが決めました－「智頭町山形の聞き書き集　恵みの山に想いを馳せる」。

そうじゃった、何にもないと思っていた村には何でもあった。ないものはこの手で作った。山からいただいてきたけぇ。ひとりで出来んことは仲間で助け合ってきた。感謝、喜び、誇り…わしらは、山の恵みと人の絆で生きてきた。忘れていたそんなことを、あの子らが聞き書きとやらで掘り起こしてくれた。

聞き書きをやって、よくよくおばあちゃんに聞くと、多くの嫌なことや辛かったこともあったんだけれども、嫁に来たときの姑の悪口と、嫁が来たときの嫁の悪口が９割くらいになるんだけれど、そこをそぎ落として生き方を救い上げていくと、この村っていいところだったんだよね、私の人生捨てたもんじゃないんだよねということが見えてくる。これって山の恵みだったんだ、村の恵みだったんだよねということに、皆が気付いていく。自分らの持続可能な暮らしがこのまま続いて、バトンタッチしていきたいもんだよねという思いが出てくる。こんなこともやってまいりました。

今、森で起きていること、それを解決するために

今日お話しすることは、森を知る＝「森の健康診断」をする、村を知る＝「山里の聞き書き」をする、これはもう澁澤先生がお話しされました。

私は、主として「木の駅プロジェクト」、「心地よさの経済」と名付けていますけれども、そのお話を中心に、エネルギーで暮らしを変える薪の駅ができないか。このような動きがつくれないものか。村の誇りと自治の再生で森が守られるんだよねという営みをさらっと流しながら、「木の駅」を中心にお話ししたいと思います。

今、起きていること

まず、ちょっと大きく、こういうことだけは共通認識しておきたいと思っております。

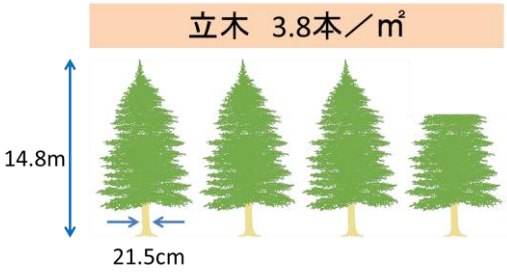
地球上では１日 100 種の生物種が絶滅している。１秒間、今しゃべっている間にも、サッカー場１面分の森林が砂漠化して、３秒あるいは４秒間に１人が餓えが原因で死んでいるというのが、今、地球上で起こっていることです。

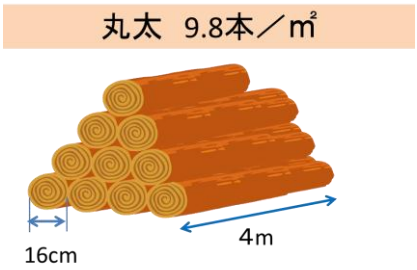
日本では、１日に 100 人が自殺しています。不安、恐れ、いろんなものが原因かと思います。食料自給率は 41％で、その一方で、１年間１人当たり 150kg も食べられるゴミが廃棄されている。埼玉県１県分以上に当たる、39 万 ha の耕地が捨てられている。木材自給率が 20～25％で、その人工林の大部分が放置林である。そして何よりも、１週間あるいは２週間に１つずつ村が消えていっている。限界集落や消滅集落になって、２週間に１つ、確実に今、消えていっている。日本では、食も人も森も村さえも捨てられようとしている。

森を知る

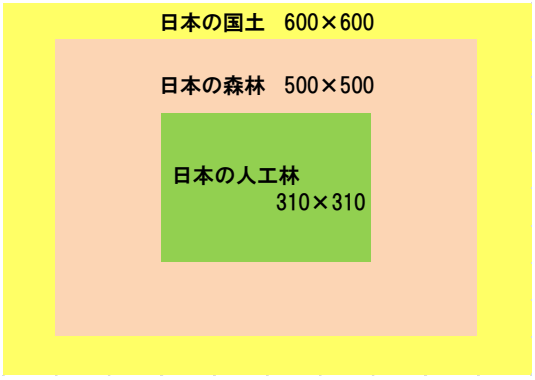
このような中で、私たちはこんなことをやってまいりました。森を知ること。

私たちが年間使う木の量は１人年間１㎥。１㎥というのは、立っている木ならあんなぐらい、丸太ならこんなぐらい。製材ならこんなぐらい。これだけの木を私たちは、山から出したり、外国から持ってきて使っているということです。

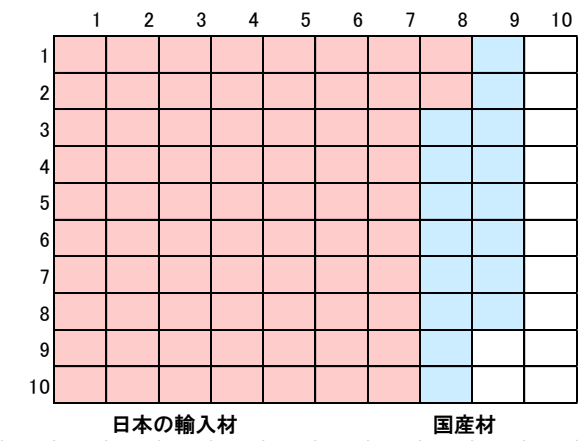




日本の国土はどれくらいあるかというと、だいたい 600km×600km の真四角になる。このうち山はどんだけあるか。こんだけです、６割。３分の２が山ということは、こういうことです。海の周りにほんの少し、農地や住宅や工場が立っている。そのうち人工林、スギやヒノキ山はどんだけあるか。こんだけあります。これが日本の国土の様子です。

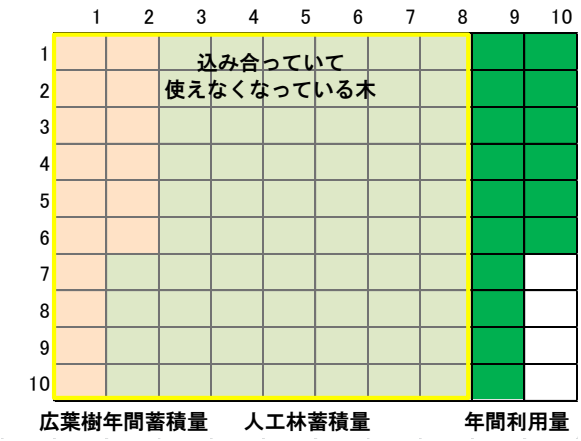


私達がちょうど年間使う量が１億㎥です。１億㎥のうちの２割が私たちの国土で、日本の国土から出されて使える量が１年間にこんだけです。使っている量がこれだけです。

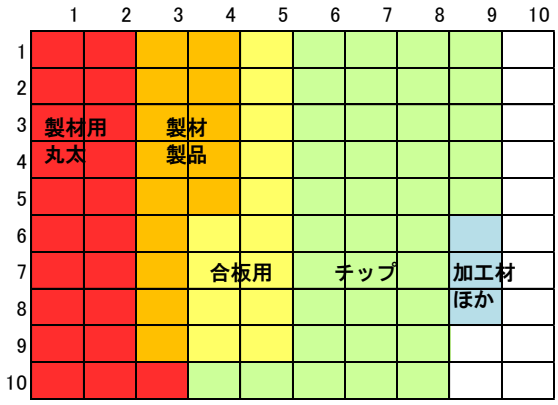


じゃあ、日本って、あんなに山があるのに、木が取れないのか、木が使えないのか。

１年間に使える量と、１年間に使っている量と、１年間で日本で成長している量は、ほぼ一緒です。そのうち使っているのは、この緑の部分で、残りの分はぎゅうぎゅうになって、込み合って、不良債権のように山に積まれている、あるいは捨てられている。こんだけは使っているけど、これだけはもうぎゅうぎゅうになって、非常に危ない環境負荷とか生活に対する負荷を起こしているということです。



その使い道はどうか。チップとしてはこんだけ使っている。４割くらい使っている。



森を知るようになったきっかけ＝東海豪雨を経験して

私達が、森ってどうなっている、山ってどうなっているんだろうと思うようになったきっかけは、東海豪雨でした。

これ〔写真省略〕は、豊田市旭町支所の２階会議室から見た 2000 年９月 12 日の様子です。NHK の映像で、目の前で幼稚園がどんぶらこと流されているのをご覧になったことがあるのではないでしょうか。その川を挟んだ向かい側がトヨタ自動車や豊田市役所がある側です。あと 30 分雨が降ったら堤防が決壊して、豊田市は水没していただろう。

それを見て豊田市長は肝を冷やした。これは山がおかしくなっているのじゃないかと思った。多くの方々達もそう思った。最上流の矢作川のダム、矢作ダム。50 年分の流木が流れてきて、ダム湖を埋め尽くし、上を歩いて渡れたと言われております。

その源流部の山には、引っかき傷のようなものがいくつもあります。これ〔写真省略〕は３日後の空からの写真ですけれども。

この元はどうなっているか。こんな形です。下から見ればこう、上から見ればこのようになっている。この両端はこんな形になっています。〔写真省略。細い高い木が密集して植えられており、地面には光が指し込まない。無数の倒れた木が転がっている。〕

これを詳しく見ます。こんな形〔写真省略〕です。「ヒノキはいいねぇ、力強いね、根がむき出しになって。あぁ、ここは草が生えてないし、つるも巻いてないから良い山だ」と言う人もいる。けれども、これは歯槽膿漏の山です。ここにはもう細根が現れて出てきて、光が入らないから、草も生えないという状況です。いわゆる放置林。

この足元はどうなっているかと言うと、こういう土人形のようなものがいっぱい立っている。ヒノキの実や葉っぱの下だけが土が残っている。

雨が降って、雨粒が樹幹にたまると、雨粒は５倍の大きさになって地面を打つ。エネルギーはその２乗ですから、雨粒は（林の外で降るときの）16 倍から 25 倍のエネルギーで地面を打つ。すると、どうなるか。石ころや種の下だけが土が残って、他は洗い流される。光が入って草が生えてると、落葉層も中層木も下層植生もあって、ぱらぱらぱらと雨粒が入って流れていくんだけど、それらがなく地面を直接大きな雨粒が 25 倍の負荷でたたくと、地面の表面に膜ができて、雨が走ってしまう。それで先程のような災害が起きているということが明らかになった。

「森の健康診断」とその結果

こんな山がどれくらいあるか。「森の健康診断」を数年前に少しやりました。６～７人のグループで決まった場所に調べに行く。100 円グッズの道具を使って。５メートル四方の中の植生、角度や方角、それから土の厚さとか落葉層の厚さ、被覆率、それからどんだけの種類が、多様性があるのかなどを、まったくの素人の市民とボランティア、研究者が一緒になって調べるという活動を始めました。

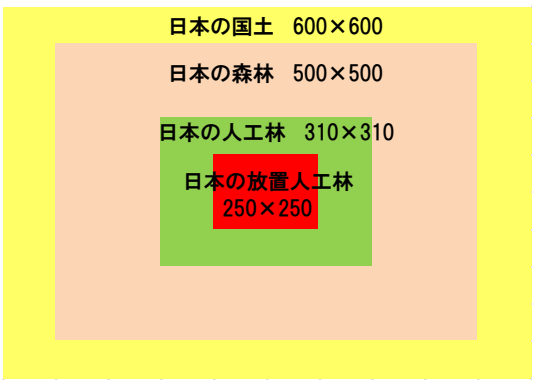
どんなぐらい木が込んでいるかということと、先程の自然植生とは関係するのだろうかということを調べます。竿をくるりと回して、皆で測ります。木の高さも測ります。それから、木を伐らずに高さを図るために、いろんな苦労をしています。

終わった後、分からない植物の名前とかは、その場で聞けなくても、詳しい方たちが待っている。植物鑑定団に聞けば分かる。

道ぐろで農家のおばちゃんが「ちょっとお茶でも飲んできやぁ、何やっているの」ということで交流も生まれていく。

その結果を研究者たちが本にまとめて、毎回、毎回、出してきました。そして、その結果。８年間で３県７市町村の 504 地点を、50 数項目について調査しました。あちこちでたくさんの人たちが集まってやりました。長良川もやりました。あるいは北海道。今、全国の 37 都道府県で行われています。その結果、こういうことが分かりました。

日本の人工林、ここまでです。国土はこうなっているよ。このうち、先程のような放置林、根がむき出しになって歯槽膿漏になって危ないよという山がどんだけあるか。



研究者たちと、非常に綿密な調査をやった結果、人工林の３分の２が非常に危ない状態にあるということが分かってきた。

森づくり委員会

じゃあどうするか。豊田市ではこういうことをやられました。森づくり委員会がつくられて、森づくり条例をつくっていこうという取り組みが始まりました。

その過程で、森づくり委員会に、私達、「森の健康診断」を手掛けた多くのメンバーが関わりました。すなわちよそ者です。素人パワーを豊田市は取り入れました。

全国でもまれに見る、豊富で信頼できるデータがある。そこで対等な議論と時間を惜しまない頻繁な委員会が行われました。この頻繁な委員会というのはどういうのかと言うと、多分、県とか市町村でも委員会というのは、年に３～４回、多くても４回あって、報告書だけ分厚いのができる。ところが「森づくり委員会」は、１年半で 50 数回の委員会が行われて、その議事録は１週間以内に公開されて蓄積されて、いつでも見れる形になっている。

そうして、条例をつくって、こんだけ環境負荷もあって、林業的な価値も下げる放置林を一掃するにはどうすればいいかというのを議論しました。その結果、豊田市は、20 年間でなくしていこうと決意をして、10 年間に 100 億円を山に投入するという決意をされました。

対等平等な議論とか、よそ者を取り込んで意見を反映させていく、かなり非常に自治的な動きをここでは保障されて、その成果がそこに反映することができて、このような流れが、今、動いている。これまで普通の森林としてあった豊田市が、一躍トップランナーになり始めています。

これが今の森の状況と、「森の健康診断」の結果で、こんなことをやってきています。

そして、「木の駅」へ

「森の健康診断」なんてそんなことを、なんですごい手間をかけてやっていくか。

調査の結果、だいたい多くの山主さんは、「僕は素人だ」と思っている。多くの方もそうおっしゃいます。そのような、山に関心をなくした、あるいはそもそも関心を持たない山主さん達に、山に目を向けてほしい、山に向き合ってほしいということで、「森の健康診断」を大々的にやってきました。

ところがなかなか…。頭では分かるんだけれども、感覚ではちょっと分かってきたんだけれども、今１歩、山主さん達が動かない。やっぱり、山はお荷物でしかないなというところまでで止まっていた。そこで、じゃあ、いい手がないのかなというところで、「木の駅」が始まりました。

木の駅プロジェクト

「木の駅」の流れ

ビデオをお見せします。

〔テレビの報道番組で放送された「木の駅」の取り組みについての特集映像が流される。映像は省略。〕

このような形で始まりました。先程、1番最後のところでアナウンサーが「企業や行政の応援」ということを言いました。

2009年12月で、先程ご覧いただいたような取り組みをやって、56tの木が集まりました。登録が12軒で、実際出したのが9～10軒でした。そのうち出荷経験があったのは、たった1軒だけだった。他は、全部出荷経験はまったくなかった人達です。

そんな形で「木の駅」が始まって、1年目は、私たちNPOが3,000円の足らずまい[1]を出しました。それを見て、2011年から恵那市がそれを負担しよう、応援しようということになりました。さらに2012年からは、全国でも初めてですが、岐阜県が、森林環境税の実施1年目にして、その3,000円の半分を、市町村負担の半分を応援しようという画期的なことを始めました。郡上の「木の駅」も多分、その流れがあると思います。そういう意味で、岐阜県の先進性というか、すごい勇気を持って始められたことに敬意を表したいと思います。

「木の駅」の中身は報告書にしてあります。100ページくらいの報告書で、様式とかやり方とかもすべて分かるようにしてあります。鳥取も恵那も全部作ってあります。それを見てもらえば、ある程度できるようにしてあります。

この報告書は1,200円で売りますよとホームページにあるんですけど、そのうち200円は自立支援施設にちゃりんと落ちるっていう形になっていて、いろんな人が関われる仕組みをつくりました。もり券（地域通貨）も、この自立支援施設につくってもらってお金が落ちるという形になっています。

全国の「木の駅」

恵那では2週間ちょっとで56tの木が集まりました。10軒ぐらいの小さな始まりでした。

「木の駅」をやってくれということで、吉野林業に継ぐ伝統林業地である鳥取県智頭町でやったときには、軽トラがずらっと集まって、非常に大きなショックを与えた。やらせではないか。これは、やらせじゃなかった。

「こんだけなければやれないのか」と思うところも出ました。逆に、「俺たちはもっと出してやる」という人達も出てきました。功罪相半ばしました。本当は5軒でも3軒でも

[1] 木の駅に集まった材木の販売価格と、出荷者に支払われる金額の差額。出荷者に支払われる金額に比べて販売価格は低いため、逆ザヤが発生する。この場合、最初の1年間はNPO法人が不足分を支払い、2年目から行政が不足分を負担した。

４軒でも「木の駅」をやりたければやろうよというものだと思います。

僕はこの智頭町の「木の駅」の初日に挨拶をして、「日本の山村が変わる歴史的瞬間だ」と申しました。体が震えました。こんなものがあちこちにできると、日本の山村は変わるだろうと本気で思いました。

その半年後、豊田市旭町。ちょうどこの日は鳥取智頭町で報告会をやっていました。そのちょうど同じ時間に、彼らは「木の駅」をやりました。智頭町と同じ台数の軽トラが並びました。

その半年後、同じ岐阜県大垣市上石津町、ここは地域に温泉を掘って、まだ温泉施設はないけど、温泉は買えるようにしてある。そこを温泉施設にするために、地域で金が落ち、ボイラーの薪を安定供給できるかどうかを確かめるため、「木の駅」を始められた。これはまちづくりのグループから始まった営みです。

その半年後、四国のど真ん中です。西日本最大の早明浦（さめうら）ダムの真下です。ダムの上流は山が荒れ、村が廃れるということに対して、何とかしたいと思った水資源開発公団の心ある方たちが動き始めました。

また、広島県と山口県境にある、島根県吉賀町というところにある柿木村では、廃校の運動場が「木の駅」になりました。この村に地域おこし協力隊で入った小林健吾という東京育ちの 30 歳くらいの子が、どうしても、村おこし、村と山を元気にするためには「木の駅」がやりたいんだということで、「じゃあやろうよ」となりました。

珍しくここは、7 軒か 8 軒のうちの半分がよそ者、半分は地元でした。じゃあ、半分のよそ者の人達は、木はどうしたのよということですね。木は、地域の人が「俺はもうやれんからお前やれよ。木を伐って出せばいいよ」という形で動きました。

この「木の駅」の逆ザヤはどうしたかというと、実は、この地域おこし協力隊とか、よそ者、役場の心ある有志達がお金を出し合って、逆ザヤを用意して「木の駅」を始めたのです。

先程の豊田市旭町も実はそうなんですね。誰も得にもならず、自腹切って何の得になるのという話だけど、やりたいんだよと。おもしろいから、自ら楽しめれば安いものだよ、ということで始めた。

豊田もそうですけど、この柿木村も、この秋から第２期を始めました。6 月からやって、その次の秋から第２期を始めたときに、町が応援すると。あなた達、そんなにがんばらんでも俺達が応援するよと。ということで、逆ザヤ、足らずまいはもう解消した。

茨城県常陸大宮市美和町では、地域のやんちゃな社長が、「これは俺はむしろやりたい」ということで始まりました。２ヵ月で 174 ㎥がドカンと集まってきた。何も動かなかったところが動き始めた。ここは、畜産の敷き藁、敷物に使っていくという流れをつくりました。

これは去年の 4 月から私が入った愛知県東栄町、花祭りで有名なところです。ここは軽トラが 30 何台くらい集まりました。ぐるっと回って、3 列まで並べないと軽トラが入りきらなかった。実はこれはやらせがありました。ある部落のおっちゃん達がものすごく元気で、10 何人のグループで毎日のように地域の山で山仕事をしました。有志を募って、グループ化して、山仕事をして。それを出荷する人達が中心になって、村中の軽トラを集

めちゃえと。そういう心意気で動き始めたところが東栄町です。

こんなような形で全国に広まって、良い木が集まる。

「木の駅」には、名前が書かれた札が立っています。多分、郡上でもそうだったと思いますけど、その名前の札のところに木を置く。

今、「木の駅」がどれくらいあるか。北は能代から、この東海界隈と山陰が多くなり、島根が増えています。兵庫県にも最近できました。こんな形で３年ぐらいの間に全国に約30 の「木の駅」ができました。特にこの１年ぐらいで倍増しました。これが「木の駅」の現状です。

「木の駅」の作法

さっきビデオでも流しましたけど、「木の駅」というのは基本的に実行委員会です。私達が恵那でやったときは、最初 NPO 主導でやりましたけど。やっぱり智頭町でやってみて、実行委員会に皆が参加して、商店も出荷者もよそ者もいろんなファクターの人達が入れる実行委員会の中で、全部議論して決めてつくっていこうよという形になりました。恵那も今はそうです。

その実行委員会へ登録して、木を伐って出して、もり券（地域通貨）が配られて、商店で使われる。

出荷される木の多くは、最初のうちはチップ工場に製紙用パルプに出されて１ｔ当たり 3,000 円。１ｔ当たり 6,000 円のもり券との差額の 3,000 円は、寄付とか、志材（寄付の材。もり券は要らんよ、寄付するからっていう材）、あるいは行政とかいろんなところからの寄付で埋めます。森林環境税もそうです。このような流れが「木の駅」です。

豊田市旭町では、よそと比べて、ちょっと行政の関わり方が変わりました。ここは補助金じゃないんですね。行政が負担金として出す。すなわち、私達も皆さんも同じ仲間です、皆さんが志材（寄付材）を出すように、私達行政もがんばりましょう、人も出しましょう、一緒に悩みましょうという形で、同じテーブルに着いた。形を違えて郡上でもだいたいそうだと思うんですけど。豊田市旭町では、補助金じゃないよということを明確に打ち出しました。これは「俺達も一緒に汗を流すんだ」という覚悟を見せたところが、なかなかすごいなと思いました。

不健全な山から、素人山主さん達が木を出すときは、だいたい１人じゃなくて仲間でやります。〔スクリーンに映っているの写真では〕２人で作業をやっています。２人で自己検尺をしています。検尺して出すときに便利だし、集積場所に降ろすときもそうです。プロは 80 歳になっても 70 歳になっても、１人で出す力と技と機械もあります。けども、素人山主さん達は、これぐらいでも山仕事ができるんだなということが見える。

もり券（地域通貨）の発券では、ここでは、社長さんが、「ちょっとお茶でも飲んでいるうちにやってやる」と、ボランティアでもり券を発券されます。そのもり券がお店で使われて、お店も山も商店街も活性化する。どんどん盛り上げていきましょうよということで、村も元気になって、森も元気になる。こういう循環ができればいいねっていうのが「木の駅」だと思います。

自己申告の紙も、最初はきちんとした紙なんですが、ほっとけば、だんだん知らん間に

広告の裏に書いてある、名前と本数だけ書いてある。これでは分からんけどだいたい読めるからいいわ、という形で案外楽にもり券が発券されている。

本当はこういう買い方をします。自己検尺で、据え口径と長さを書いて、本数を書く。そして、発券です。1,000 円単位で発券されるので、７枚発券されて次回に 500 円分繰り越しされるという場合もあります。

こうした「木の駅」のマニュアルは、ホームページで公開されています。ダウンロードできる形になっていて、「※※木の駅」とか「※※町の」というように、※※にしてあり、どこでも使えるようにしてあります。けどもまったく一緒ではないです。それぞれの「木の駅」ごとで地域の実情に応じて言葉を変えているし、約束も変えています。

けど大事なのは、出荷数量も検尺による自己申告ということです。このプロジェクトの成否は、地域で生きる１人１人の名誉と信用に関わっているんだよということです。自己検尺って、うそをついても分からないじゃないですか。「誰がそんな自己検尺をやるか。うそを書いても、10 本を 15 本と書いても分からないじゃないか」と言われればそうなんです。けれども、山村の地域はそんなことする人はいない。「あんたするかね」と言われたら、「するやつはおるかも知れんけど、俺はやらん」と。そんなことでずっと後ろ指差されたくないとおっしゃいます。そうだと思います。

最初は、１年以内に伐採したものと決めていましたけども、これは今、生きてません。キノコが生えてなきゃいいとか、ぐさぐさでなければいいとか、いろんな表現がありますが、しっかりしたものであればいい。もちろん使い道にもよりますけど。チップの場合は、そうですね、長さは 50cm 以上～200cm ぐらい、据え口は５cm 以上。枝払いして、つるや枝葉が付いていない程度でというくらいに決めています。

出す木についてあまり細かく決めると、出が悪くなります。本当は業者としては、２ｍとか１ｍとか、まとまった形がいいに決まってるんですけど、それを言ったとたんに引いていきます。皆が素人から始めていく中なので、体力もなければ、長いのは伐ればいいという形で動いていくのがほとんどです。もちろん出口にもよります。上石津町は薪にしていくので、40cm 単位でいきます。40cm ならいいよということで、ある 70 歳くらいのおじいちゃんは、何 100 束かを一輪車で全部運んだとおっしゃっていました。

いろんなやり方がある。10cm 単位以内切捨てとか。こういう約束が全国だいたい同じようにされていると思います。

〔スクリーンの写真の〕車は、地方公務員、役所の人です。息子が手伝う。軽トラはなくて、こういうワゴン車。120cm に伐って積む。１人では検尺しにくいので、軽いから息子も手伝える。「お前、なかなか勉強できなくてもこういうときに間に合うなぁ」と。「間に合うのが１番だよ」と頭をなでて、「お前に 10 枚のうちの２枚をやるわ」と。使用期限が近づいてきたので、お前も賞味期限が来る前にパーマでも行ってこいだとかということで、奥さんにもやると。で、みんなが仲良くなると。こんな風景がもっともっと増えればいいなと思うんです。

「木の駅」をめぐるエピソード

いろんなエピソードがあります。

これは想定していました。「真っすぐの良い木が出るんだよ、丹羽さん。市場に出してみたいので、高く売れるように造材の研修をやってくれんか」と言われました。やりました。市場担当者を呼んでやった。ついでにそれが市場に出せるように、ユニックのレンタルもしようか、仲間で使い合おうか、ということも始めました。ある人は、２年目にして１人で 80 ㎥を市場に出しました。

これは想定していませんでした。「このままだと後１～２年で道沿いの山の間伐は済んでしまう。奥山にもいっぱい木はあるんだから出したい。その道づくりの研修をやってくれ」という声が出るとは、思ってもいませんでした。やりました。道づくり研修をやって、中古のバックフォーをもらってきて、それをレンタルしようと。ある人は今年 200m つくりました。

そのような想定外の流れがいっぱい出てきました。「道端に転がっている木が 500 円玉に 100 円玉に見えるようになった」とか。今まで運転しておって目を背けておった、見て見ぬふりしておった林地残材が、どんどん骨になって朽ち果てていくのを見るのが本来つらからったのに、それが今は 100 円玉や 500 円玉に見えて、キュッと思わずブレーキを踏んで車を停めてドアの外に出てみるんだけど、「あ、これはよその山や」とか思って。すなわち、ゴミが小さなお宝に変わり始めた。山がお宝に見え始めたという画期的な瞬間です。

奥さんも画期的に変わりました。「あんたごろごろしているんだったら、山に行って杉小判でももらって来んさい」と言われる。杉小判というのは、地域通貨のことです。うれしいやら、辛いやらということです。

「木の駅」に関わった人達からの声

いろんな声があります。

木の駅のおかげで山に入るようになった。これまで、みんな熱心やないどころか、やらんかった。いくら間伐がいいって言ったって、木の駅があるもんで、一生懸命。

この声は大きいですね。

モリ券だと買っちゃう。モリ券で買うと、確かに大買いをする。例えば５枚あると、醤油をまとめて５本買っちゃうとかね。

モリ券を手にしてしまったために、心がぜいたくになった。気持ちが湧いちゃうのよ。1,500 円のところが 2,000 円使っちゃうような。お金の時には「たけえぇなあ」と思いながら買うけど、モリ券の時には、例えば気持ちよく、ちょっと無理するようなんじゃなく。これが１番、気持ちいい。

そんなことを言う。

木が結構、倒せるようになった。あっち倒して、こっち倒して。勉強して、本も読んだし人の話も聞いた。もっと知りたいという学習意欲ができた。モリ券を使ってどえらいうれしかった。ぜいたくなものが平気で買えるというか、かえってそれで気分よくして。木でお金を取った経験がないもんだから、ちょっとした小遣いうれしくて。

それから、

そりゃあ、なにやっても楽しくなきゃやれん。伝票持ってって、モリ券もらったときが、うれしいやね、子どもやないけど。めったに行かん、町内のお店にも行けるもんね。

親父や女房も変わった。

親父が劇的に変わった。前は「どんな木でも伐るな、いじるな」と言われとった。今は「あそこの山、あの木はどうや」と言うようになった。

また、

おかあさんが地下足袋を買ってきて。それが小さくて「こんなの履けへん」言うたら、また買ってきて、どうにかして山に行かせようと。お菓子買って、おにぎりもつくって。普通のときはそんなやさしくないんだけど、山行くときだけはやさしい、一瞬やけどね（笑）

「俺達の村のことは俺達が決められる」

実行委員会で、もり券の商店ごとの使用枚数を見ていくと、使われていないところがある。「このお店に誰か行こうよ」という形で声をかけたりしている。商店に対する思いやりが、山の人達に出ている。けれども、今まで地元の店なんて入ったことがない、あそこ何を売っているのか分からへんし、けどいっぺん入ると手ぶらでは出れんしな、とかいう非常に悩ましい動き、けど非常にほほえましい光景が村で起きている。

お手元にある資料をご覧ください。雑誌「林業新知識」に載っています。タイトル「俺たちの村のことは俺たちが決められる」は、最高だと思います。

（僕は「どうすれば木の駅を立ち上げられるか？」と講演会などで尋ねられたら、）「本気の地元の山主３人とよそ者１人いれば始められます」。いつもそう答えることにしている。そのよそ者は、固定しがちな山村の人間関係にずいぶん風を通してくれる。山の人だけの集まりも商店だけの集まりも、いつも暗く切ない話に終始する。しかし「木の駅」の会議では、それが化学反応を起こす。出荷のルール、地域通過の扱い、大型店舗や町外資本店舗の選別など（おそらく大型の他所の店舗は使えんよ、使わせてやらんよ、という形ですね）の課題を１つ１つ決めていく過程で何かが変わっていく。１人暮らしの高齢山主をどう支えるか、Ｉターン若者の参加方法は、商工会に入ってない商店はどうする、これ以上村のお店を減らさないためには、村の温泉を薪ボイラーに変えたら…。

議論の中で、山主が商店やよそ者の行く末を、商店主が山のありようを、よそ者が村の未来を、互いに思いやり始める。そして自治が始まる。俺たちの村のことは俺たちが決められるのだという実感が広がる。

このちっちゃな「心地よさの経済」と言っている「木の駅」の動きの中で、商店のこと、山のルール、いっぱいいろんなことを決めていくことで、１つ１つ、山に向かざるを得なくなる。その中で「そういえば、昔は俺達の村のことは俺達で決めてたじゃないか。誰かに任せたり、ブラック・ボックスにしたりせずに」っていう思いが生きてくる。

「木の駅」が生む効果

「木の駅」が生むもの。

林地残材が間伐促進、就業機会が多い人は、10 万円～15 万円稼ぐときもある。林業機械、特にチェーンソーが売れる。最初は埋め立てもせずに帰る人も出てくる。煙をはくようなチェーンソーを使っていた人が、この頃は売

り上げでボーンとチェーンソーを買っていく人が何人も増えてきている。

何よりも大きいのが、コミュニティが再生されてきた。山のことで酒が飲めるようになってきた。こんなうれしいことはない。土場で待っている、誰かが来るまでタバコ吸っていた、誰かが来たら「今日はちょっと手伝えよ、今度手伝うから」ー結（ゆい）が動き始めている。

森林組合とか素材業者とかとバッティングするか。そんなことはない。逆に山に皆が見に行くことで、山を何とかしていきたいという思いが動いている。

町内店舗の利用が回っていく。GDP が回っていくということなんだ。１回転して、100ｔ集まったとすれば、１回転で 60 万円になる。それが２回転すると、120 万円。公共事業の投資効果は 1.27 倍だといいます。もしも２回転、３回転と地域でぐるぐる回り始めると、村が変わる。こんな村で、軽トラをぶっ飛ばしているおっちゃんとか皆がいると、「いいところだよね。ここに住んでいて自分たちのことは決めれるなら、ここはいいところだよね、住みたいよね」という自治も動いている。

３Ｋ＝きつい、孤独、金にならない。この３Ｋも、山仕事が新しい３Ｋをつくる。３Ｋ＝楽、絆ができる、小遣にはなる。

こんな効果が「木の駅」にはあるのじゃないか。

「木の駅」の効果

成果。同じですね。仲間づくりができる。山に入るきっかけができる。お荷物がお宝に見えてくる。素人山主さん達が、皆、１人ではなく複数になって、安全安心で楽しくて教え合えて、その後、皆でついつい飲んじゃう。これが大事ですね。

境界も、なんか確定しやすくなってきて、皆、山にそっぽを向いているときは、道をつくるにしても境界を決めるにしても、できない。それができるようになってきた。

山がきれいなのは当たり前です。

商店が元気になる。大型店舗にもお客を逃がさない。実際に何軒かありました。「もう閉めようと思ったけど、これが始まったから私はまだがんばるよ。３ヵ月分売れちゃったよ、今月」。どんだけ売れとったのかと、びっくりするくらいなんですけれども。地域の商店は生命線だと。

山のことからお店のことまで、自分達のことは自分達で決める。山も商店も決めていく。快感で気持ちいいことだよね。こんなところから自治が再生する。

これは山だけじゃない。いろんなものに全部が当てはまっていく、流れができていく。道の駅でおばちゃんたちが元気になったように、今度は「木の駅」でおっちゃん達が元気になる番だというふうに思います。

「木の駅」の極意

極意。これ、僕は多分間違ってないと思います。学校区を大切にして、中学校区を超えない範囲でやる。これを超えるともう見えなくなる。本当は小学校区くらいがいいんだけど、小学校区ぐらいになると、お店がないので、だから中学校区ぐらいが１番いいかなぁと思います。

性善説、すなわち、信じきっちゃうということなんですね。村の仲間を信じきっちゃう

から、自己検尺、自己申告でいける。けど、これは役場主導ではなかなかほんとやりにくい。なんでかというと、役場というのは、行政というのは、法律というのは、性悪説です。人間は悪いことをする。だから、全国で１ヵ所か２ヵ所ぐらいあったかな、検尺の検尺をやっぱり役場はやらないかんと言っているところが。あほかと思いますけど、それは宿命なんです。しょうがないんです。そういう意味で、行政は黒子役に徹して、悪いことは実行委員長の責任にしておけばいい。実行委員長は腹だけ決めてくれたらいいという形。

逆ザヤの 3,000 円を何とかしなければならない。後〔第３部〕で、議論に参加しますが、実行委員会で議論を尽くす。ここが１番大きなことだろうと思います。

「木の駅」の課題

課題。いくつもあります。後〔第３部〕でお話も出ると思います。逆ザヤをどうするのか。今、チップ用の木材価格が下がっています。荷受制限も始まっています。

一方、エネルギーの利用にはいろんな可能性があるよね、温泉利用とか。企業も、今、山の方に向いてくれるようになっている。私らのところにもいくつか話がきている。そういうのがうまく組み合わせられないのかな。

行政ではやらずに、やっぱり実行委員会として。官民一緒でもいいから。官だけではやれないよ。なんでか。商店の選り好みができない。大規模小売店はだめだよとか言えない。行政では言えない。実行委員会では、実行委員会の総意として、地域の店を守るためにだめだよと言うことができる。検尺も、もういっぺん検尺するというと、どえらい金がかかる。そうでなくても大丈夫。それに実際のところ、過剰過大申告はいまだかつてないです。ほとんどが過少申告です。皆さん気持ちがいい。

それから、広域合併。郡上もそうですけれど、広域合併をしたところはこう言います、「１つのところ、昔の町村だけだと、ちょっとえこひいきになってしまう」。これはやらない理由探しでしかない。郡上はしっかりやられました。１ヵ所で良いことやれば、そのモデルを作って広げてやればいいじゃないかというお話です。

難問はいっぱいあります。けど、自治というのは難問がいっぱいあるから、皆が知恵を出していくほどおもしろく活気が出てきます。お金がジャブジャブにあってあって、いろいろなものがあるところは、なかなか知恵が出ずに、なんとなくなんとなく、他人事のようにやっちゃう。貧乏のところほどおもしろいのは事実です。

進化する「木の駅」

「木の駅」の発展として、恵那のエネルギー利用が挙げられます。恵那では、「木の駅」から花白温泉に薪を供給しました。ここも、重油のボイラーから、地域の薪を使う薪ボイラーに換えられました。そこに木が供給されていく。そういうことが始まりました。

また、ヒノキしかだめなんですけど、フローリングなどに使う床板の死節を埋める仕事が生まれました。これは女の人でもできる、案外力の要らん仕事で、そういう依頼が向こうの会社から来るようになった。一昨日も、実は、東栄町の「木の駅」にその会社から依頼があった。

薪利用はするといいですよね。こんな動きが始まったんです。薪ボイラーを導入しました。「これはいけるぞ」ということが始まりました。ところがところが、ボイラー屋さんは「燃えます。どんな生木でも何でも燃えます」と言いました。確かに燃えるんですけど、熱にはならない、生木は。導入前の１年間と、導入後の１年後の結果を見ると、変わらないんです。薪代分、全部損したという数字が出てしまいました。「これはおかしい」ということで、私たちNPO法人地域再生機構では、いろいろな調査をやりました。

結果、ボイラー屋さんも配管屋さんも、なかなかお互い責任を取らないというか、あんまり知らないということがよく分かった。この調査を担当した森が、全国の薪ボイラーの事例を調査した。どこも似たり寄ったりで、なんか怪しいことが多い。ブラック・ボックスが多い。それで自分達で調べて対策を練ったら、トントンでいけるようになった。けど、これはここだけの問題じゃない。もっと全国の、薪ボイラーが導入されるところが増えるときに、これは由々しき問題になる。こんなこと放置したらだめだよと、本当のことを知りたいということで、彼はヨーロッパに行きました。

ヨーロッパにボイラーのことを調べに行ったんです。チラシを作って全国 265 名の方が賛同してくれて、彼をヨーロッパへ送ることができた。そんな形で調査をしたら、いろんなことが分かりました。成果が出た。

薪ボイラーとか温浴施設に導入する場合は、コストの考え方と同時に、もう１つは、地域にどれだけ金が回るかというのが大事ですね。例えば、重油は全部お金が外国に行きます。チップボイラーを使った場合、コストはそれなりにトントンで 18 万円利益が出る、重油と比べてね。だけど、地域に残るお金は約 288 万円だけなんです。丸太の場合は、149 万円の大幅な赤字なんですけれども、お金が地域に 480 万円ほど残るんです。チップボイラーと同じぐらいの薪ボイラーで、ちょっとまともなやつを買うと、チップボイラーの場合は 18 万円で薪ボイラーが 22 万円で、コスト的にはこれでペイできる。しかし、原木として燃やす量も薪ボイラーの方が少なくて済むのと、薪を割ったり運んだりという金も地域に落ちるんです。すなわち、地域に温浴施設とか薪バイオマスとかを入れるのは、１つは地域にどれだけ金が落ちるのか、地域の雇用がどれだけ生まれるのかということを考えることが必要になってきます。花白温泉の目の前で、私が事務局長となって「木の駅」を始めました。

ヨーロッパに薪ボイラーとかチップボイラーのことを調べに行った森さんが、調査の最後の日に、この村に出会ったんです。ドイツのバイエルン州レッテンバッハ村というところです。10 年前ぐらいに合併されて、その当時は 800 人いた人口が、合併されてからほってきぼりになって 500 人にまで減った。500 人まで減ったときに、村長と村の有志達は、ここからもう逃げようか、引越ししちゃおうか、どうしようかと、皆で相談をした。その結果、太陽光発電を始めた。太陽光発電をして、自分のところの村で使うエネルギーの４倍のエネルギーを太陽光でつくっていって、売れるようになった。自分達で村の共同店舗、共同レストランみたいな建物もつくっちゃって。今は、昼間でもたくさんの方達が集まっていて、580 人まで減った人口も、元よりも増えちゃった。非常に活気のある村ができた。

この村で、村営スーパーの薪ボイラーに薪を持ってくると、500 円相当のコインがもらえる。「木の駅」みたいなことが始まっている。

それからさらにどうなったか。肉製品も乳製品も蜂蜜も干し草も、地域の道の駅みたいなところに持ってくると、全部このコインで払われる。このコインがぐるぐると、1 万枚分＝500 万円分作られて回り始めて、村が元気になってきて、非常に居心地のいい村ができてきた。

きっと「木の駅」のこれから先を展望するときに、こんな村があるんじゃないか。皆がいろんな知恵を出し合って、地域の資源を地域の中で回す仕組みを探し始める。いずれこの村長を日本に呼ぼうと思いますけれども、こんなものが「木の駅」の先にあるんじゃないのか。ただただ、林地残材を出してどうのではなくて、こういう仕組みづくりが村でつくれないのかな。

事実、いろんなところに「木の駅」ができたら、そんなつもりはなかったけど、「こんだけ集まるんだったら、温水プールを薪ボイラーに変えよう」とか「温泉を薪ボイラーに変えようか」という動きが出てきました。智頭町もそうです。東栄町もそうです。いくつかのところではそういう動きが出てきている。

そんなことまで想定して、できることなら地域通貨が 1 万枚も 10 万枚も作られて、ぐるぐる回る村ができたら素敵だなというふうに思います。

「木の駅」を通じて創られるもの

豊田市旭の「木の駅」の実行委員長は、こういうことを言いました。

「暗かった山や竹藪、荒れた土手がどんどんきれいになっていく。おやじや年寄りが背筋を伸ばして山や野良でイキイキ仕事をしている。そんな村の景色や年寄りの姿を帰省のたびに見ていると、子どもらも『自分もいつか帰ろう』と思うようになるんじゃないかな」と遠くを見る。

「美しい村など始めからあったわけではない。美しく暮らそうという村人がいて、美しい村になるのである」。柳田國男の言葉が心に沁みる。

（当日配布資料／雑誌『林業新知識』より）

このような、ただただ、金ではなくて、小遣いになるだけではなくて、村がどう次の世代にバトンタッチしていくのかというのが問われているのかなと思います。そこが見据えられていけばいいなと思います。

そうじゃった、何にもないと思っていた村には何でもあった。ないものはこの手で作った。山からいただいてきたけぇ。ひとりで出来んことは仲間で助け合ってきた。感謝、喜び、誇り…わしらは、山の恵みと人の絆で生きてきた。

（講座冒頭使用／智頭町山形の聞き書き集より）

まさにこのようなことが、これから繰り広げられたらいいなと思います。これで終わります。ありがとうございました。

4　第３部 事例発表
「たかす木の駅会議、白鳥木の駅プロジェクト実行委員会」

※　講演はスライドを用いて行われた。

はじめに

林務課・和田：

皆さん、こんにちは。今から、今年度、白鳥と高鷲地域で行われた郡上市内の「木の駅プロジェクト」の事例を発表させていただきます。高鷲と白鳥の両方ありますから、僕の方から事例を発表させていただいて、その後、講師の先生と、実際に出荷された「木の駅」の会員の方々にご登壇いただき、会場の皆さんとクロストークの形でお話しを進めていけたらと思いますのでお願いします。

市内の「木の駅」の取り組みの概要

たかす木の駅会議の概要

林務課・和田：

高鷲地域では、平成 24 年 9 月 19 日に丹羽先生に高鷲まで来ていただいて、事業の説明会を行い、そこで「たかす木の駅会議」という名称で始めようということでスタートしました。

10 月 1 日に設立総会を行い、会員 6 名で始めました。10 月 22 日に初出荷を行いました。１月８日には地域通貨「森守券」が発券されました。３月 20 日までに精算を予定しています。

たかす木の駅会議の事務局（暫定事務局）は、高鷲振興事務所で行っています。

たかす木の駅会議の総会の様子です。高鷲庁舎で、この６名のメンバーで開催されました。

実際の出荷は、たかす町民センターのグランドで行っています。たかす木の駅会議には、林務課の若手職員２名が参加してくれ、実際にトビを持って出荷の作業をやってくれています。

白鳥木の駅プロジェクト実行委員会の概要

林務課・和田：

続いて白鳥です。白鳥は「白鳥木の駅プロジェクト実行委員会」という名前で行っています。

９月 21 日に、私が進行で事業説明会を行いました。10 月 11 日に設立総会を会員７名で行いました。11 月 20 日に初出荷を行いました。 １月 28 日に地域通貨「もり券」を発券し、今月末まで地域通貨として流通されます。 来月になったら精算されます。

事務局は白鳥町那留の前田土木株式会社さんがやっています。建設業の方々が林業に進出しようと一生懸命にやられているところで、林業者の方々との間を取り持ちたいと、前田土木さんが率先して引き受けてくれました。

これが初出荷の様子です。白鳥町六ノ里にある前田土木さんの土場に、ずらっと並べて出荷をしていただきました。このように共同作業ということでやっていただいています。高鷲の出荷者と比べて、平均年齢が高いのが気になる所ではありますけれど…。

出荷者養成講座の開催

林務課・和田：

それから、「どうやってやったらいいのか」という素朴な疑問が出ましたので、「じゃあ、

出荷者養成講座をやろう」ということになりました。これは白鳥で行った風景です。

チェーンソーの使い方、チェーンソーの構造、目立ての仕方など、電子端末を使って説明しています。

同じように高鷲でも出荷者養成講座を行いました。実際に現場に行って、チェーンソーを持って木の伐り方などを勉強しました。

平成 24 年度の実績

林務課・和田：

平成 24 年度の実績ですけれども、白鳥木の駅は 26.4ｔの出材量がありました。たかす木の駅は 43.9ｔです。

金山町の金山チップセンターにパルプチップという用途で売払っています。白鳥木の駅が 63,630 円、たかす木の駅が 182,805 円という数字になっています。ここで金額に差があるのは、白鳥木の駅は、金山チップセンターから引取りに来てもらっていて、現地で引渡しています。たかす木の駅は、金山チップセンターまで持ち込んでいるので、これだけの差額が出たということです。

市・県からの補助金は、白鳥木の駅が 79,200 円で、たかす木の駅は 131,200 円です。出材量（重量）に応じて補助金が出ています。

売り払い金額と市・県からの補助金を合わせた額を、１本当たりの単価にすると、白鳥木の駅が 5,410 円、たかす木の駅が 7,160 円となっています。

地域通貨の発券は、白鳥木の駅で 142,000 円、たかす木の駅で 200,000 円です。先程の講演で「地域の流通」という話が出ましたが、この２つの木の駅、たった 10 数名ですけれども 342,000 円という金額が地域に落ちるということになります。

これが実際の地域通貨券です。上段が白鳥木の駅で使っている「もり券」です。下段がたかす木の駅で使っている「森守券」という地域通貨です。

地域通貨の使用店は、たかす木の駅は今のところ３店（高鷲燃料さん、まるや石油さん、東陽さん）です。白鳥木の駅は６店（居酒屋

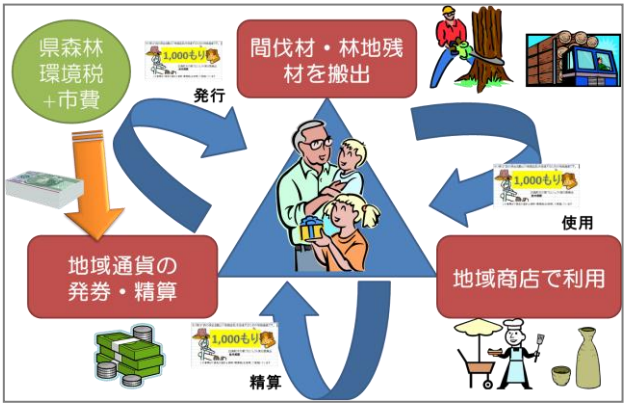
旬さん、猪俣酒店さん、ピッコロさん、レストラン藤さん、喫茶「暖」さん、三輪久さん）です。

「木の駅プロジェクト」の流れは、先程（第２部で）丹羽先生から説明があったので細かくは言いませんが、郡上の場合は、岐阜県の森林環境税と市費が入っています。県森林環境税で１ｔ当たり 1,500 円、市費で１ｔ当たり 1,500 円の、計 3,000 円がそれぞれ補助され、地域通貨の発券になっています。

平成 24 年度の実績

	白鳥木の駅	たかす木の駅
出 材 量	26.4t	43.9t
売払い金額	63，630円	182，805円
市・県補助金	79，200円	131，700円
1t 当 た り	5，410円	7，160円
地域通貨発券額	142，000円相当	200，000円相当

「木の駅」の流れ



アンケート結果

林務課・和田：

出荷者アンケートを行いました。まだ全部回収できておりませんけれども、白鳥木の駅とたかす木の駅でそれぞれ聞いてみました。

【実験前の印象】

白鳥では、「小遣い稼ぎのチャンス」が２名。「おもしろそう」「頼まれたのでしょうがない」「やっとその気になったか」というのがそれぞれ１名ずつ。

高鷲では、「自分にできるか不安」が２名。「おもしろそう」「頼まれたのでしょうがない」「面倒くさそう」「仲間づくり」というのがそれぞれ１名ずつでした。

【実験後の印象】

白鳥の方々は「疲れた」が３名、「またやりたい」「手間がなかなかあかない」という方々がそれぞれ１名。

高鷲では、「またやりたい」という方が４名。「おもしろかった」２名。「まだ何とも言えない」「もり券の仕組みを簡素化できないか」というのがそれぞれ１名でした。

「もうやりたくない」という方は１人もいませんでした。

【搬出作業の感想】

白鳥で、「だいたい予想通り」というのが３名。「思ったより大変」が２名。

高鷲の方は、「だいたい予想通り」が３名。「思ったより大変」が３名。

「思ったより楽だった」という人は１人もいなかったです。

【地域通貨の感想】

白鳥は、「地元の中で対話が増えた」「話題性があっておもしかった」というのがそれぞれ２名。「地元にお金が流れてよかった」「現金よりも気軽に使えた」「使える店が少なく地域の理解が必要」という方がそれぞれ１名ずつです。

高鷲は、「地元にお金が流れてよかった」「話題性があっておもしろかった」「まだ未利用」という方がそれぞれ２名います。

【取引価格の妥当性】

白鳥地域で、「少し安い」という方が４名。「安すぎる」という方が１名。

高鷲地域で、「少し安い」「わからない」がそれぞれ２名。「そこそこ」「少し高め」がそれぞれ１名となります。

先程申し上げたとおり、たかす木の駅と白鳥木の駅では、金山チップセンターへの運搬の費用を地元か業者かどちらが持つかということで金額に差が出たので、白鳥の地域の人は「ちょっと安いのではないか」と感じる方が多いのではないかと思います。

【今後の取引価格】

白鳥地域の方々で、「最低 5,000 円ほしい」が４名。「最低 6,000 円ほしい」が１名。

高鷲地域は、「最低 4,000 円ほしい」が３名。「最低 5,000 円ほしい」「最低 6,000 ほしい」「わからない」がそれぞれ１名ずつです。

【搬出でよかったこと】

白鳥地域の方が、「木を出す楽しみができた。市場に出せない材が活用できた。」「集材後だったので楽だった。」

高鷲地域の方は、「集積場に運搬するのに苦労したが、その分、達成感があった。」「今まで捨てていた間伐材がお金にかわった。」「最初は１人で苦労したが、仲間と一緒にやることで、林業の話や地域の話を持ち出せていいコミュニケーションになった。」「土場が町内にあって、近いのでありがたい。」「相互に協力して作業を行い、１人でやるよりも楽だった。」「山に行って１～２本玉切りして積んで、小１時間平均 0.4 ㎥。気軽に遊び感覚で楽しめる。」という意見がありました。

【搬出で苦労したこと】

白鳥地域で、「重いのを運び出すのに苦労した。」「１人で検尺は面倒。」

高鷲地域の方から、「太い木を人力でやるのには無理をする。」「想像以上に重かった。軽トラに載せるのが大変。」「機械を使わないので、持ち出すのに苦労した。」「チェーンソーを使って木を伐るのが少し怖かった。」「トビの使い方がわからなかった。」「雪が降った。」「重量を稼ぐために、水分を十分含んだ生木で 20cm 径以上のものを１人で運び出すのは大変。」

【搬出で気になったこと・改善案】

白鳥の方から「遠距離の搬出は大変。」

高鷲の方から、「林道沿いの間伐は済んでいる、奥山の出材は大変。」「１人だけでは難しい。」「初心者の１人作業は危険。みん

なと一緒にやるとよい。」「３ｔ以上集まればどこでも集積場にできないか。」「集積場が複数あると効率が良い。」「積込み、荷降ろしは経験が必要。機械があれば効率的。」「１人のときは遊び感覚。まとめて間伐・搬出すれば、気の合う仲間とお祭り感覚。これ長続きの秘訣。」

【地域通貨でよかったこと】

白鳥の方から「使いやすくてよい。」

高鷲の方から、「お札サイズで使いやすい。デザインが親しみやすい。」「インパクトがあってよい。」「地域にお金が流れるのがいい。」「お店で山の話ができた。」「燃料代になって、お酒も飲めた。」「遊び感覚で材を出してきたら、有価証券（地域通貨）に代わってちょっと嬉しい。」

【地域通貨で苦労したこと】

白鳥の方から「使用期間が短い。」

高鷲の方から、「ネーミングやデザイン（に苦労した）。でもワイワイ楽しめた。」「なぜ地域通貨なのかを理解してもらうこと。」

【地域通貨で気になったこと・改善案】

白鳥の方から、「発券が遅い。」「利用店舗をもっと多くした方がよい。」「お店にもっと理解してもらい協同事業になるとよい。」

高鷲の方から、「500 円券だけで大量になった。1,000 円券があればよかった。」「理解しやすいパンフレットが必要。」

担当者の夢

林務課・和田：

これからの私の夢なんですけれども、金山チップセンターに売るだけではなく、市役所の庁舎にある薪ストーブで、レプリカで使っていないのです。これになんとか火を入れて使えるようにしたい。そのためにも皆さん方が「木の駅」に安定供給をしていただければ、この薪ストーブを燃やすための薪にできる。そうなれば市も買い取ることができる。

それから今日の会場となっている大和町には、やまと温泉やすらぎ館という、日本でも有数の来場者を誇る道の駅の温泉がありますので、ここのボイラーも薪に変えていけるくらいの材が安定的に出荷されるようになれば、ますます高い値段で取引ができるのではないかと希望を持ってこの仕事をしています。

会場との意見交換

林務課・和田：

今までのご報告を交えて、先生方と、実際に出荷していただいた会員の方々にご登壇いただいて、お話しできたらと思いますので、よろしくお願いします。

〔講師、白鳥木の駅実行委員会メンバー、たかす木の駅会議メンバーがそれぞれ登壇〕

「木の駅」をやってみての感想と「木の駅」の意義

林務課・和田：

先程、会員の方々からの実験前の印象と実験後の印象がアンケートにあったのですが、実際のところはどうだったのでしょうか。たかす木の駅会議の会長さんからまずお話しいただけませんか。

たかす木の駅会議会長：

ご指名を受けましたけれども、決してすごいことをやっている訳でもないです。いま、逆ザヤ 3,000 円のうち、郡上市からは 1,500 円、県からは 1,500 円の補助金をそれぞれ５年間出してもらっているので、その間になんとか軌道に乗らないかなーと始めたのが現実です。が、郡上市役所の和田さん達が一生懸命になってくれて、いろいろお話しをしてくれます。地域でお金が回るとか、山がきれいになるとか、先程の丹羽先生のお話のように本当になったらいいなー、そのようになったら最高やなーと、なんとかそうなるように軌道に乗らんかなーと今は思っています。

林務課・和田：

丹羽先生その辺はどうですか。

丹羽：

１回、２回、３回、４回…「木の駅」をやるたびに、いろんなことが動いていくと思います。多分、１番大事なのは、先程（第１部で）澁澤さんから「真庭の 2010 年」というお話があったように、「どんな村にしたいのか」ということが大きいだろうなと思います。というのは、「木の駅」というのは、ちょっと形を変えるだけで地域への波及効果が大きく違ってきます。例えば、島根県のとあるところでは、林地残材を収集すると、ある商工会の商品券が補助金として配られます。これは、全国規模の大手ショッピングモールでもどこでも使える商品券が、補助金の代わりに配られるという仕組みと変わらないのです。地域通貨と商品券では、似ているように思われるかもしれませんが、中身は大違いだと思います。

先程、地域通貨のアンケートの中で、「デザインを皆で考えるのが大変だったけれどおもしろかった」とありました。デザインとか使い方とかルールを自分達で決めていく中で、村のデザイン、地域のデザイン、皆の暮らし方、関わり方を議論していったんだと思います。そうしたことをせず、行政が全部お膳立てしてというのは、せっかく１番おも

しろいところを楽しめない、変な言い方をすれば、苦労するのを楽しめないということになると思います。そこら辺をどう考えていくかによって、この「木の駅プロジェクト」は180 度まったく違う事業になっていくと思います。

今、会長さんがおっしゃっていたように、５年間の中で皆が山に目を向けるようになるかどうかがポイントだと思います。

山に目を向けるために、僕は知る限りで１番簡単で皆が参加できるのが「木の駅プロジェクト」だと思います。他の人もいろんな人が参加できる仕組みとしては１番良いなと思うのと、地域おこし関係のいろんな事業の中で、費用対効果が桁違いに１桁も２桁も大きいだろうなと思います。例えば 100 万円の予算をつけたとして、その波及効果は測れないほど非常に大きいと思います。

そこを踏まえて、もう少し、村をどうしていくのか、次の世代にどうしていくのかを考えていくことが必要です。

実は豊田市では、木の駅女子部というのをつくっています。実行委員会にお金がないので、女子部が商品を作ったり、いろんな工夫をしてお金を稼いで人を呼び込むということをしています。

実行委員会とか木の駅会議とか、その取り組みの中で多様な人達が関わる仕組みをつくっていけば、観光客を含めて大きい効果があると思います。

それから、出荷された木の出口を皆で相談すること。先程、役場の薪ストーブのことや温泉施設の例が出ていましたが、そこにどう供給していくかということを皆で妄想をたくましくしながら考えていければと思います。もう他所ではやり始めていることで、東栄町では来年くらいにやるかもしれないです。温泉のボイラーに薪を使うことと、「木の駅プロジェクト」というのは、案外セットで動きやすいものなのです。

「木の駅」の経済効果と若者の意識

会場からの意見：

ちょっとお伺いしたいのですが、なかなかおもしろい構想で感心を持って聞いたのですが、何かもう１つインパクトがないような気がします。これは、高齢者の小遣い稼ぎとしてはいいかもしれないですけど、これを職業として若者に紹介できるかという問題があります。今後５年間の補助があるけれども、それまでにきちんとした職業にもっていけるかどうかということです。

まずは消費の方で、今はチップ材として出荷されていますけれども、需要の多様性をもっと増やさないと計画倒れになったりするのではないかと思います。

「木の駅プロジェクト」のアイデアは素晴らしいのですけれど、どうも甘いのではないか、力強さがない気がします。そこら辺のつっこんだ議論をして、基礎を固めて対応しないと、若者がこれで食っていくというところまで持っていけるのかどうかと思います。

澁澤：

この問題は２つに分けて考えなければいけないと思います。まず１つは、地域通貨がプロジェクトの中に入っているということをどう考えるかです。

先程、真庭市の例は、地域通貨を用いないで現金 3,000 円で取り引きをしています。そ

れでも材は出ることは出るのです。現金3,000円でやると、製材所とか事業者がそれに合わせて出してくるというのが中心になります。

それが地域通貨になると、一般の人達が出荷するようになります。一般の人達とは、実は木を植えた人達が多くて、要するにかつては農業をやっていたけれども拡大造林のときに国が植えろと言ったから、青草を刈っていた刈場に木を植えたという方々です。

農業の歴史と林業の歴史とはまったく違っていて、日本の中で、森で食ってきている経験がある人はほとんどいないのです。森で食っている経験がある人は、ごく特殊な地域だけです。木曽や吉野といった特殊な地域にだけ林業家がいただけで、普通は基本的に農家林家なんです。そうした農家林家の人に山を扱ってもらうようにするには、地域通貨が使える。

更に、それが6,000円で使えるので魅力になっている。6,000円が魅力ではなくて、地域通貨が使える期間は長くても6ヵ月間なんですけれども、地域にとってはその間に何回転したかによって効果が出るんです。

それが1回転しかしなかったら、地域振興券を出しているのとまったく同じですから、そこからは雇用が生まれないし、地域の経済の発展もそれほど出てこない。それが2回転する。お店の人が地域振興券を受け取って、またそこでお店の人が使うと、初めて、例えば1万円が2万円の効果になってくる。地域通貨はこういう仕組みになっているんです。それで地域内経済を大きくしていこうというのが1つの目的です。

それはどういうことかというと、日本が高齢化で中山間地域が疲弊して、なかなか職もなくてという話をされるのですが、中山間地域の側から外に出ているお金を考えてみてください。

先程、豊根村の話がありました。エネルギー費というので、ものすごくたくさんのお金が外に出ていきます。それから教育費もものすごく出ています。高校に下宿させて通わせると、1年間で100万円かかります。3年間で300万円。大学に行かせると1,000万円のお金がかかる。

先程の膨大な燃料費（エネルギー費）と教育費と医療費、この3つによって、地域からものすごいお金が外に出ていっているんです。それをどうやって地域内に戻していくか。地域通貨を用いることで、地域内の経済を大きくしていけば、そこに新たな雇用が出てくるのではないかということが地域通貨側の考えです。

もう一方、若者の話をされたのですが、3.11の東日本大震災以降、私が地域を歩いていて気付いたのは、若者が急に地域に入り始めたということです。それは国の仕組みとしても、「地域おこし協力隊」みたいなものができて、若者が一定期間、国の援助を受けながら地域で暮らし、そこで住み着く若者達が多くなってきました。

最初から地域へ移住する学生達も多くなりました。そういう人達はどういう暮らしをしたいかというと、自分の食べ物くらいは自分で作る。別に農業をやるわけではないのです。JAに出すほどの物は作れない。それは分かっている。だけど、虫食いでもいいけど、米と日常の食べ物の半分くらいは自分で作れるような暮らしをしたい。

それで仕事はどうするかというと、どっかに勤めて一生サラリーマンで食っていくと

思っていなくて、月３万円～８万円くらいの仕事を３つか４つ組み合わせてやる。別に定職というものがなくてもよくて、支出を抑えて小口の現金収入をいくつかやる。昔で言う「お百姓」なんですけれども。昔は農家もやるし大工もやったりして、手間賃稼ぎがたくさんあったんですね。手間賃稼ぎをやりながら自分の暮らしをつくっていって、月 12 万円くらいで生活する。その代り、食費は一切かからない。で、燃料も山で薪を持ってきて、お金がかからないという生活を設計するという若者が多いのです。

その学生や若い連中と話をすると、コンビニみたいな豊かさも求めていないし、大手ショッピングモールやスーパーなどの豊かさも求めていない。その代わり、地域コミュニティの中に自分が入れて、なんらか地域の役に立って、そして、そこそこ食っていけるような暮らしをしたいというような若者が非常に増えてきている。

「木の駅」だけで食っていける人は、そんなに出ないと思います。だけれど、高知の土佐の森なんかでは、「木の駅」だけで食っている人もいますし、集材の仕方や山の道の付き方でも違うのですけれど、１ｔ当たり 6,000 円でやって、月 20 万円くらい稼ぐ連中が出ています。そうして月 20 万円稼げれば、おかあちゃんが他所で働くと、それなりに家計を支えられて、林業としてやっていけるのではないかという人も何人か出てきています。

が、「木の駅」は、あくまでもそこを求めるのではなくて、地域で暮らすときに、月３万円や５万円くらい稼げることがプラスアルファになることによって、地域に住みやすくなる。特にＩターンやＵターンで来て仕事がないと言っている人達にとっては、月３万円や５万円はものすごく大きいお金になってきますので、そういう効果があるんじゃないかと思っています。

最初に戻りますけれども、地域内で地域通貨がグルグル回りだすと、急激に倍増してそのチャンスが大きくなる。地域通貨が地域に知られて、半年の間に何回もグルグル使われていくことが、一方でとっても必要になってくるのだろうなと思っております。

うまく説明できなくて申し訳ないですけど、よろしいでしょうか。

国産のスギやヒノキを使った集成材

会場からの意見：

八幡町川合地域のものですけれど、「木の駅」の構想自体は、僕らがやっている地域づくりと同じことだと思うのです。地域の産物を加工して、生産者と加工者がうまく連携をとって楽しんでいくということです。

ただ、木の問題ですけれど、郡上は木の国で、僕らが子どもの時は、スギの木やヒノキを１本売れば学費ができて、高校に行けたという時代です。それから僕たちは、70 町歩ほど団地造林をしたんです。森林組合が下刈りなどをやって、現在は 40 年生くらいのスギなりヒノキなりの製品ができています。しかし、実際に今、若い者に自分ところの山がどこの山か知らない者がすごく多くて、当然、境界も知りません。そういう中で、郡上の山をどうやって守っていくかということになると…。

「木の駅プロジェクト」は良い構想ですが、これをうまく運営するには大変だと思います。

ただ、今、建築の様式が変わってきて、集成材を使う大工さんが非常に多くなってきているということです。そういう時代になって、製材がどんどん減って、八幡町にもいくつもあった製材が１ヵ所やっているだけです。そういう中で、外材の集成材よりも日本材で集成材を作って、建築屋さんにも喜んでもらい、そして家を造る人にも喜んでもらえるようになってもらいたい。外材の集成材を作る会社はいくつもあるでしょうけれど、なんとかして日本材で集成材を作る会社を郡上でつくり、うまく運用をできないかなと思うのですけど、いかがでしょうか。

澁澤：

集成材のことですけれど、日本にはいくつも国産のスギで集成材を作っているところはあります。問題はスギの場合は非常に水分が多い。含水率が一定ではないんですね。要するに、木ごとに含水率がものすごく違う。そういうようなことがあって、１回乾燥した後に削らなければならない。そのロスが外材に対してものすごく多いんです。

それから、ご承知のように、人工林で育ってきたスギ材は目が粗いです。基本的に集成材は全部で強度をつくっていきますから、外側に外材を持ってきて内側に日本のスギを入れて作るというハイブリットな集成材を作っている会社もあります。また、トレーサビリティで、１本１本硬さを測っていますから、外側に硬いのを持ってきて内側に柔らかいのを使って集成材を作るということをやっているメーカーもあります。

ところで私達というか私なんかは、スギの色目というのはとっても温かくていいと思いのですね。でも今の若い大工さん達は白木に慣れている。外材の白っぽいのに慣れているので、表に出ない材なのに色のついた材を嫌われます。同じ値段で棚に並べておくと、確実に白っぽい方を買っていかれます。

日本というマーケットの中で売っているからそういうことなんですけれど、この地域は集成材でもいいから地域材で家を建てようと合意ができていけば、今は、ほとんどクロスで隠していますから赤白関係ないので、需要をつくることはできるかもしれません。

「木の駅」を通して山を次の世代へ伝えたい

たかす木の駅会議会員：

今、山を取り巻く状況の中で林野庁の出してきている森林や林業再生プラン。数々のプランが出されても、山はどんどん廃れていくばかりです。会場におられる林業の先輩方、どうやって自分の森林、そして郡上の森林を次の世代へ渡していくかということに関して、良い案を出してくれと言われた時に、多分どなたもその案を出していくことができないと思います。

岐阜県の森林環境税を使って、奥山の間伐を進めましょう、水が大事だから。しかし、奥山の誰も入らないところをどんどん間伐してみても山づくりにはなにもつながらないと私は思います。

日本の林業をよくよく辿ってみると、江戸時代はお殿様が持っておられて、木を伐ると首をはねられるような時代もありました。明治の時代に林業というものはありません。郡上では、木を出してもほとんどのところ自分達で使っていた。昭和の 30 年頃から 50 年にかけて非常に林業が盛んで、先程おっしゃったように１本売れば子どもを学校に行か

せることができるという時代がバブルとしてあった訳ですけれど、今、私たちは山でお金がもらえるということを経験したことがない者ばかりです。

そういう人達に「山をやりましょう」と言っても誰も飛びつくことができません。そういう中で、じゃあ山をどうやって再生していくかを考えたときに、今度大きな製材会社も来ますが、多分、先輩方が自分で植えた山はすべて皆伐をしてしまって、これで山づくりが終わってしまうかも知れません。次に植えることがまったく不可能になってくるでしょう。

そういう中で、これからの若者に、先程あったような「10 何年後の私は何をしているのだろう」ということを与えるという意味で、「木の駅プロジェクト」というものは非常に大きなものだと思って、私は会長とともに始めました。

会長が最初におっしゃったのは、「お金の問題は２の次にして、まず皆でやってみるということが大事じゃないか」ということでした。だから「じゃあ私も乗りましょう」と。そして「志」の「材」と書く「志材」と言われる、半端なものは寄付だと。それで立米（リューベー）数を稼ごうと。そういう意味でいけば、先程林内に残った残材も、苔が生えてなければ出しても良いとおっしゃったんですが、そういった木は非常に軽くて径が 30 ㎝のものでも２ｍで伐れば担げるんですが、重量からいくとその木はお金になりません。だから、その辺は胸が痛んだのですが、結局伐り倒したばかりの、水をいっぱい含んだ木を出しました。先程のアンケートに書いたのは私ですけれど、伐り倒したばかりの水を含んだ木は、持ってみると２ｍのものは、径が 20cm を超えてくると１人で動かすというのが無理、難しくなってきます。だから運び出すのを皆で一緒にやろうと。

今日ここに高鷲振興事務所の和田君が来てくれましたが、彼らのような若い人達と一緒に、楽しみながらやろうということで、下手な者ばかりでトビの使い方を全然知らない者がやるものですから、木が転がって落ちていったりしますけれども、そういうような人と人のつながりの中でやっていく。

今、何も良い案や政策がない中で、この「木の駅プロジェクト」は、地域おこしという面でももちろんそうなんですが、やることによって何か１つ光が見えてくるではないかと思ってやっています。それが今の現状です。

会長のご理解があって初めてできたことですけれども、これにもう少したくさんの先輩方に加わっていただければと思っています。お金（地域通貨）で一杯飲むということの関係ありなしに関わらず、そこの場でこんなことがあった、あんなことがあったというお話をしていただければ、また違ってくると思います。できたら皆さんのお孫さん達も一緒に入れるように、中学生が来たら 500 円券を１枚渡そうとか、そういうところから次の山づくりが、もしかしたらできるのではないかと思って、私はこの「木の駅プロジェクト」に参加させてもらっています。

スギやヒノキを薪として活用する

会場からの意見：

僕は、先程から言われている「よそ者」の１人なんですけど、会長さんと森の中で出会ったというか、同じ仕事の手伝いをさせていただいているんです。小中学生の林業体験のお手伝いです。

小中学生の林業体験というのは、確かにお金にはならないんだけど、僕もこの地に住む以上、少しでも灯油を使う分を薪ストーブに回して、自分の燃料は自分で手に入れたいと思います。例え１本でも薪作りができるようにと思って、一緒に小中学生と同じ林業体験をさせていただいています。

今日お話を聞いていて、スギの間伐がそんなに無駄、チップにしか使いようがないんだったら、スギも薪として使う方がいいのかなというふうに思い直しました。じいさん、ばあさんも楽やし。スギでは暖かさは少し落ちますが、量で稼ごうかなというふうに思いましたが。先輩教えてください。どうなんでしょうか。

それから、澁澤先生にお伺いしたいのは、先程の話の中で、木質材の使われ方には、「エネルギー利用」と「物質利用」の２つがあるとおしゃっていました。多分、物質としての利用の中に含まれるんだと思うのですが、たまたま今日の新聞に、「和傘を作る時のろくろの部分はエゴノキが非常に都合が良い」ということが載っていました。文化としての木の使い方があるんですね。それは大事な側面なので、これから子ども達に木や森の役割を話す時には、ぜひその点も入れて教えていただけるとうれしいなと思います。

会場に何人か仲間もいますが、自分はニホンミツバチと関わっているんです。蜂蜜を一部いただいてはいますが、それは森を守っていく、広葉樹の森や林を活かしていくために必要な先人の営みだというふうに僕は理解して皆さんにお話しするんですけど、経済的な問題やヘルシーばかりに目がいってしまいがちですが、もう１つ、私たちの生きる力は森や林からいただいて生かされているんだと思うので、また機会があったら教えていただきたいなと思います。

たかす木の駅プロジェクト会長：

スギは薪としてはどうかということですが、火力的にも広葉樹よりありますし、割るにも楽です。ただ、焚き物として使うときは、乾燥を十分することです。乾燥させないと蒸すような感じで煙突に煤（すす）が溜まって、それが炭素になって、火事の原因になります。安全面としては煙突掃除をするということで十分対応できると思いますし、火力的には十分あります。

先程、丹羽先生が、「高鷲でどれだけの燃料が使われているか」ということで、５億円とか 10 億円という話が出ていました。本当に大きいお金が化石燃料や灯油に使われているんですね。化石燃料を焚くよりも薪を使うことの方が良いことは分かっているけど、ただ、寄せてくるのが大変だと。確かにそうなんです。その辺はシステム的に協力し合うということができれば十分可能なことですので、よろしくお願いします。

経済性ではない「木の駅」の意義

会場からの意見：

私は、林業そのものが生業としては育っていかないと思っています。だから発想を変えて、「先祖代々受け継いできた財産の保持」ということで考えていかないと。とてもじゃないが、若い人の参入を期待したり、地元の経済を潤すというのは、立ち行かなくなると思うんですよね。

今、私も 75 歳になりましたけど、まだ力仕事をしたって若い人たちには負けんと思っているんですが、そういう人たちが自分の

山を手入れして、お金が 3,000 円ももらえるんなら結構なもんやという気持ちになっていかんと。お金儲けにならんから若い衆に入ってきてもらえんで、若者が期待できんとかいう発想は変えて、働けるうちはゲートボールやグランドゴルフに行かずに、山へ軽トラで行けば、1 日 1,000 円なり 2,000 円になるんやということで、「木の駅」を広げていってもらった方が理屈に合うんでないかと、私はそう思いますがどうでしょうか。

丹羽：

その通りです。少しさかのぼってお話しします。

境界もはっきりしないまま動いている。ではどうするかというと、地籍調査をやるかといってもやれる見通しもない。その中で「木の駅」が動いくときには、自分のところの山から木を出すためには、境界を仮でもいいからつけたいですよね。それが広がっていく。ということで、境界をある程度自動的に確定していく可能性が出てきたということが 1 つ。

それから子どもの関係では、「森の健康診断」的なことや間伐体験的なものを、子どもや都会の人を相手にやることが多いんですけども、その時に「木の駅」とセットにするんです。３回来てもらって３回分をもり券（地域通貨）で払ってあげるという形をとることがいいのではないかと思います。

実際、恵那では、コカコーラと朝日新聞と一緒に組んで、これから７年間ずっとやり続けて、10 数町歩をやっちゃおうという動きができています。

地域でもり券を作るのですが、「子どももり券」を作っているところもあります。

そういうことで山に触れていく。山って暗いだけじゃなくて、お小遣いにもなるんだ。山の恵みをもらう実感を持ってもらえるという方向が見え始めてきました。

それから、燃料利用と都市住民とのつながりをつくろうと思ったら、巻き枯らし間伐、あるいは、きらめき間伐（皮むき間伐）を夏の間にやらせて、木を伐り倒すのはプロにやってもらう。そうすると木を担ぎ出すのが軽いんですよ。燃料利用しようとすることが明確になっているんだったら、それに早めに手をつけて、それをやった人にもり券 500 円やもり券 1,000 円、あるはそれ専用のもり券を渡す。そうすれば、その人たちはその地域のリピーターになって、ついでに温泉にも入っていくし、お土産も買っていくという仕組みができていく可能性があります。

特に、皮むき間伐は夏じゃないですか。軽くなる、楽ちんになる。次にプロの出番。倒すのが大変というのもあるかもしれないけども。そういう仕組みづくりに関わっていけると、地域通貨の使い道は「これもあるよね」「あれもあるよね」というふうになります。

一昨日の話では、奥三河には温泉がいっぱいありますが、その温泉と同じ数くらい「木の駅」ができつつあるから、共通もり券や温浴券などできないかと。そういった訳の分からない妄想の世界に入っていくんですよね。これって非常に楽しいことだと思います。

チップ業界の関係からは「１m以上にしてよ」という声は当然のこととして出てくるんです。その時に、１m以下は乾かそうよ、燃やそうよとか、あるいは、良い材はこうしようよと、会議の中で皆が、プロの人はプロの

知恵を、都会の人は都会から来た人の発想を、若者は若者、女子は女子の発想を組み入れていって、「なんか俺たちがつくっちゃったんだよね」ということを始めていくといいと思います。

「木の駅」があるところはほとんど県境です。単独で動こうとがんばっているのに吸収合併されて埋没しそうなところ、なおかつ、小学校の入学者数が５人とか 10 人とか１つの大台を超える時、その時にやっと「何とかしなければ」と思うんです。「地球最後になってもこの村だけ残ればいい」と誰もが思っているんだなと思うんですけど、そのためなら、１肌でも２肌でも脱ぐだろうと。

それは何かというと、先程の澁澤先生の話と一緒です。子どもや孫のためなら、うちらは何でもやれるだろうと。その動きが次につながっていって、子ども達は逆に、俺達が帰ってくる度に、おっちゃん、おやじ、おじいが元気になっている姿見せつける仕組みが今ある。ゲートボールを指す訳ではないんだけれども、胸張って威張って皆でワイワイ酒盛りをやっているって素敵じゃないですか。

ということが各地でできていっているということが、モデルとしてではなく、事実としてある。豊田市旭なんかは「木の駅」を始めてもう４期目に入っています。２ヵ月やって、次は３ヵ月やってと続いてきました。それをずっと見てきた。地域の新年会で呼ばれて飲んでいたら、70 歳くらいのじいちゃんがこう言いました。「丹羽さん、１期目はみんな腕組んで見とったんだわ。２期目はちょっとのぞき始めたんだわ。３期目に入ると俺もやらないかんかなと思い始めたと、４期目に入ってなだれを打ちだした」と。

そこでは、地域通貨は、最初はおっちゃん達が豪快に酒とつまみを買っていたと。今まで並カルビを買っていたのが上カルビになったとか、吟醸を買って行くようになったとか。それが４期目になって変わってきた。それは何かというと、おかあちゃん達がもり券（地域通貨）を持って来始めたということです。

地域通貨の売上の１位はいつも林業機械だったんだけれど、２位が婦人服店になった。地域で「木の駅」とかもり券のことは当たり前にしゃべられるようになって、第４期が始まってから 10 数人の登録申し込みが出てきた。ちょうど小学校区ごとに「木の駅」があるのだけれど、自分の小学校区ではいっぱいになって、遠くの小学校区しか置き場がないという現象が起きてきた。というのが、今、何年も「木の駅」をやっているところの動きです。

もちろん、苦しんで悩んでいるところもあります。でも悩みながらも「止めよう」という声は１つもないんです。やろうとしたけど、「いいな」と言っている限りではやらなくて終わっているんです。けれど、やったところで「止めよう」と言ったところはありません。値段を下げようかと議論したとき「値段が下がっても俺達はやりたい」と言ったところもあります。

地域のことにどれだけ関わっていくのか、関わっていれるのかみたいなことが、だんだん快感に変わってきたのかなという気がしています。村が良くなる兆しが見えてきたというような気もします。

そんな形で、１期の評価だけで考えずに、２期、３期とじっくりこれから見ていって、順調に苦労して、壁にぶつかっていくと良い

知恵がひょっと出てくると思います。あるいは、必要な人材がひょっと出てくるかもしれません。そんなことを醍醐味として考えながら見ていくと、地域は楽しくなっていくのかなと思いますし、私はそういう場面に出会えればいいなと思っています。

広葉樹はおもしろい

澁澤：

広葉樹の件だけ少し追加をしたいと思います。

広葉樹はとてもおもしろいと思います。今は人工林の間伐材ばかりが狙いですけど、林野庁もやっと来年度から、広葉樹に対して補助金を出せる仕組みができてきましたので、広葉樹はおもしろいと思います。

なぜかと言うと、ヨーロッパは林業先進国だと言われますけど、ヨーロッパに行かれた方は分かるかと思いますけど、だいたい４種類くらいの樹種を覚えていればほとんど分かるんです。ところが日本の森に入ると、４種類の樹種が分かったって、木の種類は全く分かりません。日本の森はものすごく多様です。

なぜかというと、多分郡上にも旧石器時代の遺跡があると思うんですけど、日本の旧石器時代にヨーロッパはどうだったかというと、氷河の下なんですよ。要するに、そこは人が住めないところだった。日本は旧石器時代に、遺跡が、しかも山側にあったというのは、山が多様だったからです。つまり氷河期で植物が逃げてきて、日本の場合は日本海があったから氷河に覆われなかったために、日本はある意味で標本箱みたいになったんですね。ものすごく多様な広葉樹文化を持っています。

それぞれの木をどう使うか、ハマりだしたらものすごい。それをビジネスにしているところがたくさんあります。

例えば、普段皆さんが召し上がっているソーセージ。それぞれのハムメーカーがありますけど、そこ専門に広葉樹のチップを出している会社があります。小さい会社です。例えばチップの中に、「コナラをこれだけ、ミズナラをこれだけ、桜をこれだけ…」と全部ハムメーカーから要望が来るんです。その通りにチップを出します。その中に１個でもキハダが入ると、全部だめになったりだとかということがあるんです。その広葉樹を見分ける、その会社の若い人たちは本当にプロです。別に鬼皮が付いていなくても、原木を見ただけでどの樹種かだいたい 100 種類くらい言い当てることができます。

そのくらいになっていくと、非常に付加価値の高いビジネスを生むことができますし、山をきれいに維持することもできるということで、先程の「木の駅」を機会に森に興味を持たれたら、ぜひ広葉樹はおすすめだと思います。

子ども達に伝えること

会場からの意見：

先程、澁澤先生と丹羽先生の素晴らしい話をお聞きしまして、本当に共感しました。ありがとうございました。

実は、私も２年程前に、八幡西中学校で全校生徒を対象に、山のことについてお話をさせていただきました。「郡上の山は地域の宝」というタイトルで２時間ほど話をしました。

その後、子どもたちが全員感想文を書いてくれました。私の手元にも１冊届きました。２～３紹介をしますと、「僕は都会がいいと思ったけど、やっぱり郡上に住んでみたいな」とか「僕は郡上高校の森林科学科に入りたいと思っているけど、いい話を聞けて良かった」。さらには、「僕は大人になったら、郡上の材料で家を造りたいな」という子どももいました。

今は材価が安くてほとんどの人が「山みたいなのはだめだ」と言われるんです。山持ちの人でもそういうことを平気で言われるんです。

だけど、私は話をする中で、山は何も言わないけど、私達に大きな恩恵を与えてくれる。その１つは、豊かな水を安定的に供給してくれる。もう１つは、山の木は二酸化炭素を吸って酸素を出すということで非常に空気をきれいにしているんだと。それから、山の景観などで癒されるんだよと。だから非常に素晴らしいんだ。変なことを言ったら罰が当たると話しましたら、子どもの作文の中に「僕は山に神様が住んでいると思う」と。今の子どもでさえ、そんなことを書いてくれる子もいました。

つまり、子どもたちは真剣に話してあげると、本当に素直で純真でそのままきちっと受け止めてくれるのです。ですから、今思うに、小さい頃からきちっと話をしてあげて教育をするということが、これからの郡上の山に関して非常に有意義であるとつくづく痛感しました。

何事も「だめだ、だめだ」と言っていては前進しないので、「木の駅」ということで高鷲や白鳥の方々が一生懸命骨を折られて発足されていますが、やはり、第１歩、２歩と踏み出すのが１番大事なことではないかと思います。高鷲と白鳥の方に十分なエールを送りたいと思います。

さいごに～みんなで「木の駅」をやろう～

林務課・和田：

（午後５時の）お帰りのチャイムも鳴ったところなので、この辺で終わりたいと思います。

八幡のＯさん、やらんかな。Ｈさん、大和をよろしくお願いします。高鷲の方々は、和田君が高鷲振興事務所で待っています。白鳥は、前田土木さんが事務所で待っています。他にも、明宝、和良、美並の方々にぜひ声をかけてください。

先生方に頼んででも「木の駅」をやれるような勘考をしたいと思いますので、会場に来ていただいた皆さん、ぜひご協力をよろしくお願いします。

それではこれにて終了したいと思います。